

***「月刊文集」一七六四年一月號、二〇一二頁。
【西伯利人種學上の研究】

ミルレルが西伯利でこなつた人種學的研究は右にちとらず興味あるものである。彼は原住民の習慣や道徳について觀察をとげる機會にぶつかると決してそれをのがさなかつた。トボリスク市ではタタール族の婚禮や割禮の式に參列してこれを仔細に觀察してゐるし、いろいろな地方を通過する際に相隣接して住んでゐる各種民族のシヤマン達を自分のところへ招いて、その呪術を自分の前でやらせて親しく觀察したりしてゐるのである。*

*グメーリンの著書の箇所にある。たとへば第一卷一三六—一四四頁。一六三—一六七頁。二八三—二八八頁。第二卷の四四—四六頁。八二—八九頁。三五—一三六頁。四九—一四九頁。五〇—一五〇頁、等々。

これらの觀察は「古來よりロシアに居住する諸民族について」と題する特別の記述中に纏められてゐるが、それはまた歴史的研究のためにも充分な材料を與へてゐるところのものである。

*たとへば「西伯利國誌」一二〇頁を見よ。また「月刊文集」一七六四年一月號。
【西伯利言語學上の研究】

ミルレルが西伯利でなした言語學的研究についても、一言ふれておく必要がある。彼は異常な努力をもつて原住民の方言を蒐集してそれを書きつけていつた。彼はたとへばトウルハンスク市へタウガ

族の人員が到着するといふので、その民族の言語を知るためにかなり長い間、わざわざ待ち受けてゐたのである。*ミルレルの蒐集した西伯利異民族の方言に關する豊富な資料は、後になつてフィシメルが利用してゐる。

*グメーリン「紀行」第三卷二一九頁。

【西伯利考古學上の研究】

最後に、ミルレルはその旅行中に熱心に考古學的な踏査を行つてゐる。グメーリンの著書に載せられてゐる、グメーリン自身やミルレルの考古學的發見の記録は、非常にもしろく讀むことのできるものである。たとへば曠原の中にあるカルムイク族の寺院「セミ・パルト」であるとかアフライ・キイトの廢墟の踏査研究のごときがそれであつて、そこからは夥だしい數のツングースおよび蒙古の古墳の發掘物や文書がもたらされてゐる。彼は「遊牧民族の君侯たち」が埋葬されてゐるといふ洞窟の中へも危険を冒して深く踏査の足をいれてゐるのである。*

*グメーリンの第一卷および第二卷の箇所。またラドフの「西伯利の古代」(Pavlov: «Drevnaja Sibiri») 第一卷第三冊の附録に、西伯利の考古學的踏査についてミルレルがフィシメルに與へた指令の抜萃が記載されてゐるのを参照。

この領域におけるミルレルの仕事の成果は論文「西伯利におけるツングース文書」(«De scriptis Tungusicis in Sibiria repertis»)「古墳中に發見された若干の古代につづての説明」(«Kraschenne o ne

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

которых археологов, в которых находимых» * * * * * 西伯利の古墳について「Von den alten Gräbern in Sibirien」 * * * * * 等である。だが印刷に附せられた西伯利に關する歴史的著作の中では、ミルレルは考古學的資料をあまり多く利用してゐる。

三七一

* 「タタリ・アカミ」紀要「Commentarii Academiae Petropolitanae」一〇號一七四七年。
** 「月刊文集」一七六四年。
*** 「新ロシア」の附加「Bejagen zum neuveranderten Russland」一七四〇年。

私は西伯利の地理學に關するミルレルの廣汎な調査、とくに彼の地圖書編纂上の諸勞作に言及することを敢てしまふ。ただ、この地方の長いあひだの植民のことを記述する事を任務とする學者にとつては、まだ正確な報道のごく僅少であつた地理問題の豫備的な研究が必要であつたといふことを指摘するにとどめる。

【西伯利の科學的研究の開拓者ミルレル】

ミルレルが西伯利に於けるロシア植民史の編纂に利用した諸資料は右の如きものである。彼れ以前に於ても、また彼れ以後に於ても、誰一人としてこのやうに現地に於いて親しく検討し觀察した豊富にして精確な報道をもつて歴史的著作に着手した者はない、といふことは確信をもつて斷言しようとするにとどめる。

ところである。廣汎にして多方面な資料の選擇といふことの中に、ミルレルの歴史家としての根本的な特徴が發揮されてゐる。云ひかへてみれば、嚴密に検討し盡されしめて飽くまで精確に組立てられた史實の再生といふことにたいする彼の熱意がそこに示されてゐるのである。彼にとつては、ごく些やかな細部の闡明といふことも極めて貴重なものと考へられたのであつて、彼はそれをば、口碑傳説のうちに、古代の遺物のうちに、また東洋文獻のうちに、探求したのであつた。第一源泉から汲み取られた事實をもつて著述を整理してゆくといふ彼の習慣は、その仕事の仕方の中にも反映されてゐる。ミルレルは自分の手に明確な源泉資料を有つてゐる場合には錯綜した問題を批判的に論斷することを好んだし、又それを爲しうる才能をもつてゐた。彼は各種の報道を巧みに對照し、多種多様な記念物が示すところを比較検討して、それを土臺として慎重にして權威ある結論を作りあげたのであるが、それはただ保存源泉が充分な材料を提供してゐる場合にかぎられてゐた。そして彼みづから自分の手許に眞正な記念物の助けを感じない場合には、彼は自分の智慧で判斷を下すことを避けて、あつさり自己の無識を承認してゐるのである。彼は混亂錯綜したエルマクの西伯利遠征の年代に關する問題については臆測をさけて卒直に次のやうに述べてゐる。

「私はここに見いだされるやうな解決しがたい、そして後述するやうに疑問のあるその（西伯利遠征の）時期について曖昧な説明を十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三七三

試みようとは考へない。*

*「西伯利國誌」一二四—一二五頁。

事實を基礎として仕事を進めることに習慣づけられた人間——ミルレルは、事實が缺けてゐるため抽象的な判断に移らねばならぬ場合には力を失つてしまふのである。

かくのごとくミルレルは歴史の任務にたいする原則的な見解においても資料の選擇においてもまた著述の仕方においても、ロシアにおける西伯利の實際的歴史の編纂に適格した者であり、この關係における彼の功績の偉大なことは疑ふ餘地がない。「歴史書」の有りふれた型からいへば、正確な史料が缺けてゐる場合、彼が源泉のうちに求めえない事柄は自分勝手な臆測をもつて埋め、科學的方法の缺陷を無内容な修辭法でごまかすこと稀れでないが、ミルレルは、源泉の文書を基礎としてロシアの西伯利植民の歴史に客觀的な總括をあたへてゐるのである。個々の事實は、真正な記念物に立脚して檢覈され、それぞれの決定は源泉にたいする豫備的な大がかりな仕事を基にして遂行されてゐるのである。

【ミルレルの「西伯利國誌」にたいする批判】

ミルレルの著書は彼の同時代の人々からも後世の人々からも往々にして過小に評價されてゐる。ミ

ルレルの西伯利史研究を自分の名をもつて廣く讀者に紹介したミルレルの助手で且つ競争者であるフイシネルは、彼の著書にたいして輕蔑的な態度で云つてゐる。

「古文書を勤勉に讀み、これを採録し、西伯利の獵師どもから聞いたことを書き集めるといふやうな西伯利史の編纂には、裁判書記の智慧で事足りる。」*

*「歴史および古代ロシア」誌《История и Древность》一八六六年第三號「學士會員ミルレルおよびフイシネルと西伯利誌」《Академик Миллер и Фиснер и Очерки Сибири》

現代においてはミリュコフ（九四）が彼を「學者性の伴はないとどろくべき克明さ」であると云つて次ぎのやうに見てゐる。

「往々にして機械的な仕事に關聯する際限のない蒐集の仕事は眞の學者の執り得るところである。ここでは勤勉努力と健全な思考とのほかには何物も必要としない筋肉労働者——健康で力の強い筋肉労働者が必要であつたのである。」*

*ミリュコフ「ロシア歴史思想の主たる潮流」Миллеров: «Историческое течение мысли в России»（1898年版）第一卷八一—八二頁。この著者はシュレツァ「社會と個人生活」(Schütz's öffentliches und privates Leben, 1905) のミルレルに關する批判の影響を受けてゐるものゝ如くである。

彼れはミルレルの著作をこの様に批評してゐるのであるが、この特徴づけは全然妥當しない。むしろミルレルはヨーロッパにおける科學的歴史批判の始祖たるシュレツァ（九五）と比肩しえないし、彼れには廣い綜合的な構成がなく彼の方法論的手法は歴史研究の新らしい方向を開拓してゐるものでは

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三七五

ない。しかしながら彼は嚴格に科學的に仕事をしてゐるのである。彼の本領は——覆へりやすい假説

がなく勇敢な見透し説がなくまた廣汎な統合もない。だが源泉を熟知して問題を全面的に調べあげ資料を深く汲み盡して科學的に組立てた學術的なモノグラフィにある。

彼は或る程度に抽象化されてゐる一般的前提を排撃しつつ、一定のアウトラインが引かれてゐるロシア歴史の個々の問題にたいする古文書的な仕事に努力を傾けた二十世紀初頭の歴史家中の若干の人々に近いのである。

【西伯利國誌の學問的價值】

ミルレルは西伯利の歴史の闡明にたいして單に龐大な史料を持ち込んだといふのではない。彼は批判的に史料を選択したのみならず生の材料を基にして、西伯利におけるロシア植民過程の眞の姿を提供することを爲しえたのである。彼の著書の細部にいかなる修正が行はれやうとも彼が設定した領域においては、彼は自分の目的を達成してをり、西伯利の逐次的征服についての歴史的概観をあたへてゐるのである。これにたいして附加すべきものは極めて僅少で、今日にいたるも尚ほ誰れが西伯利史に手を染めるとしてもミルレルの「西伯利國誌」はその出發點となるべきものであることを認めねばならぬ。

三七六

彼は支離滅裂に分散し往々にして混亂錯雜してゐたところの諸事實を整頓して、それを一貫した一本の糸に結び合せ、西伯利史の骨格、修飾のない構圖をつくり上げたのである。まだ全體として、ロシア史の領域でもさうした著作の存在しなかつた時代に、それを完成したのである。ミルレルの著書の特色は爾後の西伯利史編纂のうへに反映されてゐる。後代のすべての學者たちは大きな程度において彼の「西伯利國誌」および彼の手で蒐集された資料に據つてゐる。科學的根據をもつ、丹念で精確な汲めども盡させぬミルレルの著作的寶庫の中には完成された資料の分類がこなはれてをり、西伯利史の充實した構想が與へられてゐる。新たに古文書の詮索をすることも、新規に問題の基礎的研究をしてかかることも最早やその必要はないのである。

三、西伯利史編纂上におけるミルレルの影響

【ミルレルの西伯利國誌とフィシエルの西伯利史】

ミルレルの遺産を最初に利用したのは、學士會員フィシエルであつて、専門家のために書かれた「西伯利國誌」よりももつと廣汎な讀者層を對象とした壓縮版をつくるため、一七五三年（實曆三年）にミルレル自身がその出來あがつた諸章を、彼に手交したものである。このカムチャツカ探検の參加者

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三七七

（フィシエル）は獨立した著作に手をつけるべく餘りにも怠け者であつた。自負心がつよくて常識を缺いてゐた上にロシアの歴史については全く門外漢であつたフィシエル（彼はよきラテン學者であつたラテン語を通しての東洋學者であつた）は自分の任務にも座なりな態度を持してゐた。一七五七年（寶曆七年）にドイツ語で出版され、そして彼の死後、一七七四年（安永三年）にロシア語版が世に出ることとなつた「西伯利發見の初よりロシアの武力により占領されるまでの西伯利の歴史」(«История открытия Сибири по занятии сей земли русскими орудиями») (略稱はフィシエルの「西伯利史」)は、本質においてミルレルの著書の當該諸章の簡略化された受賣りである。權威ある科學的な構想もなければあまり詳しい詮索もせずに纏め上げられたこの書は、眞面目な讀書習慣をもたず、ミルレルの長い引用文やその學問的な論述に重厚さを感じてゐた一般社會の要求に投じたものと思はれる。それは著作プランも事實的資料も全部ミルレルに據つたものであつて、そのことについてはフィシエルが卒直にドイツ語版の序文^{*)}で述べてゐる。フィシエルは西伯利古代の人種に關する論述で些やかな意見を立ててゐるのが例外なだけである。これはミルレルが當時結論をあたへることを慎重にさし控へたところのもので、その材料はやはりミルレルのものである。

^{*)}ベカルスキ「アカデミアの歴史」第一卷三六八頁、六三三頁、六五頁。フィシエル評については同上、五四頁、六一九一六

^{*)}フィシエルの「西伯利史」ロシア版にはこの序文は載つてゐない。すでに獨立の著作としての名譽が出来あがつてゐたためである。

【カラムジンの「ロシア國史」とミルレル】

その後、カラムジンが西伯利の歴史に關する若干の新しい源泉（たとへばストロガノフスカヤ年代記）を齎らしてはゐるが、彼もまた西伯利の歴史の密林中における導きの糸としてミルレルの足跡を進んだことは信するに難くない。

カラムジンが主著「ロシア國史」(«История государства Российского» 中の西伯利の歴史に該當する部分にあたへてゐる註釋を検討すると、彼(カラムジン)はミルレルの名を掲げてをらぬ箇所でも本質においてはミルレルを反復してをり、西伯利史の最初の著者がその行間の隨所に顔をだしてゐるのが窺はれる。

【ミルレル文庫の蒐集古文書】

フィシエルのやうな同時代人のみならず、時代的にミルレルにかなり近いカラムジンのごとき文學者が彼れに據つてゐるし、またずつと後代になつても古代西伯利の研究者たちは引きつづいて長い間ミルレルの著作から非常に強い影響をうけつづけた。西伯利史に手を染める場合にいつも源泉として

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

汲みとられた基礎資料はミルレルが西伯利からもたらした史料の集積であつた。ベテルブルグ公衆図書館及び舊外務省モスクワ古文書保管部に保存されてゐる汲めども盡させぬミルレル文庫は、全十九世紀を通じて歴史古文書の出版者に西伯利文書の豊富な資料を提供してきた。「圖書及び條約集成」(Собрание Руск. Правот, и Договоров)「歴史的公文書」(Архив Исторических)並びにその補遺たる「ロシア歴史文庫」(Русская Историч. Библиотека) (一八七五年刊)の第二巻「西伯利の歴史記念物」(Памятники Сибирской Истории) (一八八二年——一八八五年の考古學探検隊の出版)、更にまた一九一四年グネウシエフの出版した「ワシリー・シュイスキー帝の治世における公文書」(更載せられてゐる史料文書などの大部分はミルレルの文庫から採られたものである)。

一八七九年(明治二年)にフツィロが編纂した外務省史料の「西伯利關係文書および寫本索引」(Указатель дел и рукописи, относящихся до Сибири)は事實上ほとんど例外なくミルレルの蒐集文書に據つたものである。

【法令全集】と西伯利關係文書】

「法令全集」(Полное собрание Законов)が出版されるとともにこの出版物に集載された西伯利關係公文書の集積がミルレルの蒐集と統合されることになつた。

【ボターニンの西伯利史料、西伯利局文書史料】

一八六六年——一八六七年(慶應二年——三年)に有名な西伯利研究家ボターニンは「歴史と古代ロシア」誌上に「西伯利史料」(Материал для Истории Сибири)といふ表題で、十八世紀時代の史料からの抜萃を印刷に附した。またようやく一八八〇年代になつて舊司法省の保存文書中に保管されてゐた西伯利局文書からの獨立した抜萃資料がやや大量に印刷に附されはじめた。

一八八九年になつて西伯利局文書に精通する有名なエヌ・エヌ・オグロブリンがはじめてミルレルの抜萃の缺陷に注目して原文出版の必要について意見を發表した。***

*「ロシア歴史文庫」第八巻、一八八四年。

*オグロブリン「西伯利局文書及び書籍記事」第一輯、第二〇輯。同人の「ビブリオグラフ」誌一八八九年第一號、第八、九號の論文。

【シュチエグロフの西伯利歴史年表とアンドリュエヴィチの西伯利史】

西伯利史の整理編纂方法とその一般的構成にたいするミルレルの著書の影響はそれ以後においてもつづいてゐた。十九世紀の全時代を通じて研究家たちは依然としてミルレルの著書を利用してゐる。

十九世紀の八十年代に出版されたシュチエグロフやアンドリュエヴィチの著書がそのよき例である。シュチエグロフは「西伯利歴史年表」(Хронология Сибирской Истории)を編纂したが、それは十一

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

世紀（長保年間以降）から一八八一年（明治十四年）にわたる編年の年代記のごときもので、この著作はさきほめて良心的で手引書として有益なものである。そして十六世紀および十七世紀に関するかぎり、ミルレルがこの手引書の基礎となつてゐる。アンドリュシチがミルレルに據つてゐることは一層鮮明である。彼の著書「西伯利史」《История Сибири》（エカテリナ・ペトローヴナ女帝の治世まで）は、彼の知るあまり多いとは云ひがたい西伯利関係の歴史書からの、認識の缺けた寄せ集めである。彼れは全體的に「西伯利國誌」と「月刊文集」に載せられたその續編、およびフィシエルを土臺としてゐるのであるが、古文獻委員會の手で印刷に附せられ、その一部分がソロヴィヨフの「ロシア史」中に利用されてゐるミルレルの西伯利関係の豊富な資料にさへも觸れてはゐないのである。彼れは事實の選擇のみならずプランそのもの（十六世紀および十七世紀の歴史）さへもミルレルに隨つてゐる。そしてミルレルの資料が終つてゐる所へくると、彼は法令全集およびシニェグロフを利用してゐる。十八世紀から十九世紀の二五年代までを包括する彼の他の諸著はそれ以上に不手際なもので、それ以前の時代の研究のためにミルレルが彼れに與へた主導的な構圖が、そこでは缺けてゐるのである。

* 一八八九年に出版された。そのほか彼により「古代より一七六二年までのザバイカル略史」《Краткий очерк истории Забайкалья с древнейших времен до 1762 года》。

написан в 1762 году. 一八八七年。ザバイカル史執筆の參考書《Историческое описание Сибири Забайкальской области》一八八五年。「法令全集の資料による西伯利史概説」《Полное описание Сибири по данным законодательства》。Иос. Ос. Басанов「エカテリナ二世時代の西伯利」《Сибирь в царствование Екатерины II》。「十九世紀における西伯利」《Сибирь в XIX в.》等が出版されている。

ミルレルの著作は總ての點で良心的なものであるが、それにしても十九世紀のロシア歴史學の要求を完全に満たすものではない。ミルレルは後代の著作事業のために立派な指導方針をあたへつつも尙西伯利植民の外観的な歴史を描いてゐるにすぎず、この過程の内的方面には觸れてゐないのである。彼れは必要な仕事の最初の第一歩を成し上げたのであつて、彼の著書なしには西伯利の過去にたいする本質的な研究は不可能であつたであらう。彼れはその後継者たちに西伯利史の研究を容易ならしめた。が、すでに十九世紀の三〇年代（天保年間）になると、ロシア民族による西伯利植民の過程と、それに關連するものもろの現象をもつと深く突つこんで研究するといふ要求があらはれてきた。この方面で最初の企てをなしたのは西伯利出身の學者ビョートル・アシドレヴィチ・スロフツォフである。

四、十九世紀における西伯利史編纂の課題とスロフツォフ

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

スロツォフはまことに興味ある人物である。その教養と世界観とにおいて、彼は十八世紀ロシアの典型的な人間であり、宗教學校の生みの子である。彼れは著作の方法論においても、またそれ以上に問題の立て方においてもいはゆる「理性」の支配した時代の國家神學が攝容した純粹理性主義の押印とともに神學校式煩鎖主義のあらゆる缺點をその身うちに培養された人物であつた。それは完全に十九世紀型の學者である。宗教學派の制約的な學者性をもち、スベランスキイ（九七）の親友でまた同僚であり、そしてトボリスク神學校の哲學と雄辯學の教師であつた彼は、その説教によつて十八世紀九〇年代の半ばにトボリスクの一般社會の注目をひいてゐた。いくらか文學的リベラリズムの傾向をもつた。その時代の宗教的辯論の型にはめて組立てられた彼の説教はエカテリナ女帝時代に特徴的なものであつた。

【スロツォフの著書】

彼は説教の内容が忌諱にふれて審判のためベテルブルグへ召喚されたが、エカテリナ女帝崩御のために一旦手をつけられた事件はそのまま不問に附せられ、その後、一七九七年から一八〇八年（寛政九年—文化九年）まで宗務院總裁附の下僚の役をつとめてゐた。賄賂關係がなにかの金錢問題にかか

はりのある失策のために彼は歐露における勤務を能められ、運命はふたたび彼をトボリスクへ追ひやつた。彼は流刑地でトボリスク總督府の文官となつたが、當時の權勢家であつたスベランスキイの庇護に一縷の望みをかけ、自分の追放生活を呪つてベテルブルグへ歸ることにあせつた。そして中央の許可なしに總督ベステルの隨員中に加はつて首都への歸還を企てたが、途中から引戻されてしまつた。かがやかしい立身のいとぐちを掴まうともがいてゐた彼も、とうとう運命にまけて西伯利で下級官吏の職につき、しだいに自分のあかれた生活狀態に慣れてくるとともにそこで西伯利の現狀と過去の研究に手をつけはじめた。多くの旅行をし、多くのものを觀察し、手に入るかぎりのものをことごとく讀破した。すでに一八二六年（文政九年）に彼の著作「西伯利よりの手紙」《Письма из Сибири》それから一八三〇年（天保元年）に「トボリスク近郷遊歴記」《Полыная повесть Тобольска》が出版された。それは十八世紀時代の憂鬱な旅行を美文學的な調子で會話を挿入したり高踏的な題目につづての論議を加へたりして書きあげた、一種獨特な、西伯利の地理と歴史に關するこの獨學者の特別な興味を表現したものであつた。そして遂に「老境に入つて閑日月をもち俗事から解放された」彼は大著述の編纂に手をつけ、「西伯利の歴史的鳥瞰」*（以下「鳥瞰」と略す）《Историческое Описание Сибири》を書き、それが一八三八年——一八四四年（天保九年—弘化元年）にわたつて出版さ

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

れたのである。*

三八六

* スロフツォフの傳記的資料は「鳥瞰」第二版の序文に集められてゐる。スロフツォフに關する文獻は、カイ著「西伯利史家と
レフ・イ・スロフツォフ」追憶「Bakshi: «Izvestiya I. A. Gromova, kaz nepopnyu. Otdelnyy» 参照。

その外觀的形式からみれば「鳥瞰」はその時代の神學生風な不條理なスタイルで書きあげられた十
八世紀型の著述である。この本を最初に一瞥したときには、讀者は彼の混亂に満ちた、時として獨り
よがりな、また時としてナイーヴな叙述法に戸惑ひしてうんざりさせられてしまふ。どの頁をひら
いても唐突な美辭麗句をつらねた脱線が眼につく。彼れは宗教的な論議や詮索をやたらに汎濫させてゐ
るのである。

「おゝ永遠なるものよ！もし汝の光輝燦然たる珠玉がそれほどに力づくで堅氷に閉ざされたる邊境の地に創造されるとするな
らば……」*

といった調子でビョートル大帝の分縣制度が永久性のないことと、地上世界の無常とを結びつけて滔々
と論じはじめるのである。

「人間界の創造物の運命はかくの如きものである！光りはあるであらう！とひとたび眞べられたならば、永遠に光りがあると云
ふことは唯一の神にのみ屬する！」**

彼は好んで道義的な章句を汎濫させた。ポーランド叛軍の指揮者サモイロヴィチ(九八)が流刑され

た場合について彼は云ふ。

「憤怒なる人間よ！健康とそして健全なる精神のためには汝にも我にもいかに些やかなものを以て足るかといふことを信ぜよ。
のために苦しい生活體驗が必要であらうぞ。」***

* 「鳥瞰」第二版第一卷、二九八頁。

** 同上 一六四頁。

*** 同上 一七六頁。

それとともにまた十八世紀の合理主義哲學の精神に透徹した論議が散見されるのである。たとへば
彼は云ふ。

「野蠻なる民族どもは曠野の馬の群のごとく、ただ互ひに眞實もなく馴れ馴れんで人間本來の權利も理解せぬ自然なるものであり、總
じて道義の登きことを知らぬのである。」*

ある時はまた單に氣まぐれな、持つて廻つたやうな文學的修辭法にたいする彼れ自身の嗜好を發揮
してゐる。

「歴史は惡意なしに語り傳へることく、また嘲笑なしに侮辱するものである。」*

だが、かうした陳套なわれわれが讀み慣れぬ記述の形式の蔭には伶俐な觀察者のするどい眼光と淺
流學者——といふのは神學校はさうした學問的體系を授けてゐないから——の繊細な思想がひらめい

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三八七

てゐる。

三八八

スロフツォフはミルレルの著書について次ぎのやうに云つてゐる。

「ウラルからアワチア海までの植民とその後の領土獲得に關する物語については史料の照明者たるミルレルがこれを完成し、すでに炬火と時間とによつて照明しつくされてゐる。」

「ミルレルとフイッセルとは……西伯利征服の端利からの記念物を、歴史のなかに載せるのはどうかと思はれるほど些末なことで細かく傳へてゐる。それは綜合的もしくは根本的な解釋を必要とするところのものである。」

*「島嶼」第二版第一卷一〇〇頁。

*同上 一二五頁。

*同上 序文二〇頁。

*同上 二八五頁。

スロフツォフは西伯利史に關する問題の現状に言及して「なにが爲すべきこととして殘されてゐるか？」と設問し、それに答へてゐる。

「變遷してきた統治の状態を西伯利の住民の記憶の中に再生させること……領土の安全を考慮し、官廳を設立し、その生活の力を促進したり停頓させたりしていくから整備されてきた政府の方策やその相貌のそれその段階を想ひ起し、また何よりも多く個人や社會の生活態様を紹介することである。」

云ひかへれば彼は西伯利といふ土壤の上に於ける植民の内部的な歴史と社會生活の態様の變遷とを、描くことをその目的として立てたのであつた。彼の言葉を藉りて云へば「それは二百五十年間といふ廢墟の下から聞へてくる叫び聲であると思はれる。」

*同上 第一卷序文二二頁。

彼は植民に伴ふもろもろの過程のうちに「統一を、技術的にでなく内面的な統一を、いつでも適時に政府自身に教訓をあたへるところの人民の聲を」*探求してゐるのである。歴史家の任務はこの「統一」を發現することにある。

「それぞれの所與の時間を貫ぬいて歴史の糸を張りめぐらす。」

ことにある。スロフツォフにとつては支離滅裂な歴史の現象を繋ぎあはせる基礎的事實は「公正な裁斷」と「正教」といふ二つの觀念のうちに具現される文化の普遍にほかならぬ。

*同上 第二卷序文七一八頁。

*同上 第一卷序文二八頁。

彼にとつて、文化の達成は「永遠に戰鬪的な平和精神をもつてする鬪争」であつて、「それは克服さるべきもの」として描かれてゐる。十八世紀のすべての人々がさうであつたやうに、合理主義者の

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三八九

彼はこの闘争の役割を組織的な社会力——すなはち政府と社会とに負はしめてゐる。そして彼は注意ぶかく「公正な裁断のために如何なる方策が政府によつて新たに講ぜられたか、また正教の事業のために如何なる成果が教会の子たちによつて爲しとげられたか」を追跡してゐる。

そして彼は研究対象として取りあげてゐる諸々の出来ごとの中に「人民の聲」の模倣たるを聴き、彼れ一流の莊重な言葉つかひで、彼の研究してゐる諸過程のうちにおける大衆の役割や事實の複雑さを指摘してゐる。

「尚ほ、また合成されてゐないこの地方全體、もしくは群衆の精神のなかには、共通の色彩はあらはれてゐない。」

結局、彼が自著の第二巻および第三巻の結論で強調してゐるやうに、彼の全叙述は「切り離しがたい人民の福祉の友である教会と、公正なる裁断の歩武が、遠く前進したであらうか否か」*を示すことを目的としてゐるのである。

* 同上 第二巻序文八頁および二九二頁。

スロフツォフは研究の中心を外観的な歴史から内部過程へと移行させつつ必然的に、彼の先行者たちがしたのとは異つた形で歴史上の諸事實を分類しなければならなかつた。彼の興味は諸事實の編年のな列挙にあるのではなくて、内部的な連繋にある。かくして彼は植民過程を「時間的な序列にした

がふことなく河の配列と流れにしたがふ」* 一定の構圖のうちに觀察してゐる。そしてこの場合彼は個々の事實のなから「一般的ななとして決定的な解決をもとめ、歴史に載せるべきかどうかと思はれるやうな重要性の乏しい事柄」**を拭ひぬとして選擇を行つてゐるのである。彼は全くいろいろな事實の内部に含著されてゐる内容の方面、それらの事實によつて表現されてゐる思想の方面から觀察をしてゐる。たとへば隣接諸國との間に結ばれた條約は彼にとつては「一つの脱け殻」だと考へられるのである。

「核實そのものは政府がその陰に包蔵してゐた、また西伯利南部の隣人にたいして抱く思慮のうちに示された策略中にある。」**

* 同上 第一巻二二頁。

** 同上 二八五頁。

*** 同上 一六六頁。

【鳥瞰】の構成】

スロフツォフはかうした一般的考察から出發して西伯利の全歴史を四期に分けてゐる。

一、一六六二年（寛文二年）まで。

二、一六六二年から——一七〇九年（寛永二年——寶永六年）まで。

三、一七〇九年から——一七四二年（寶永六年——寛保二年）まで。

四、一七四二年から——一八二三年（寛保六年——文政六年）まで。

十八世紀以降の西伯利史編纂の主流流

そしてこれらの各時期の範囲内で年代順によらず實質にしたがつて個々の問題の分類をおこなつてゐる。しかしながら、彼が觀察してゐる各時代における現象の體系は一貫してゐない。彼れは第一期のために次ぎのごときプランを有する。まづ第一に、その時代の「西伯利のありさま」を描くこと。すなはち「西伯利の占領と確保」を概説し、「植民と領土の占有」ならびに植民の諸状態（「人民の災厄」や「享樂」）の鳥瞰圖をあたへ、その先きで「施設」と「制度」を記述し、この題目のもとで政府の財政的方策、驛遞制度、農業十分の一税、交通などにふれてゐる。最後の部門は「結果」であつて、この結果といふ言葉をスロフツォフは西伯利植民の結果としてあらはれた諸事實、アジア諸民族との交渉、商業、移民の構成分子とその數、と解釋してゐる。

著者は決して統一を缺いてはゐないこのプランをその後の二つの時期（一七〇九年——一八二三年）を記述する場合には踏襲してゐない。彼はそこでは材料を次ぎの表題の下に配列してゐるのである。

- 一、西伯利の地理的概観。
- 二、領土占有過程の完遂と隣接諸國との交渉關係。
- 三、第三期における統治組織（統治の構成について）。第四期におこなはれた一般的監督制度の下に西伯利を二つの縣に分轄した歴史。

- 四、西伯利の國家經濟（國富の増大について）および經濟方面における政府の諸方策。
- 五、教育（二つの意義において）——異民族間におけるキリスト教の布教とロシア人における教化啓蒙。
- 六、商業および産業、鑛山事業および工藝。
- 七、移民の風俗習慣（西伯利の生活）。
- 八、個々の都市と地方とに關する報道。

一般的プランにおいては甚しく一貫性が缺けてゐるけれども、そこでは根本的方向が充分な連鎖を保つて表明されてゐる著述は廣汎にして新規な法則の上に立つて考案されてゐる。完全かつ體系的に記述された、西伯利領内におけるロシア民族進出の内部過程の全貌をあたへることが計畫されてゐるのである。問題は、自分みづからに課した課題を、スロフツォフがどの程度に達成しえたかといふことである。彼れの著書は、彼の同時代人である西伯利の住民にとつて、その郷土の歴史の一種の天啓であり鍵鑰であつたが、その課題を全體として彼は完遂しなかつた。また完遂しえらるべきものでもなかつた。

【鳥瞰】と資料關係

その原因の第一は彼の手にあつた資料の貧弱さであつた。十六世紀および十七世紀の記述のために彼の知識の源泉となつたのは例外なしにミルレルの著書と法令全集とであつた。彼は自己について語

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

つてゐる。

三九四

「私は他人の實驗のお蔭を利用する怠け者であり且つまた適當な時機に保存史料の東に手をつけることを爲しなかつた。」
* 同上 第二版第一卷序文八頁。

古文獻調査委員會の文書さへも彼は利用することができなかつた。といふのは「鳥瞰」の第一部が「完全に出來あがつたのち」にそれらを「時々くれて」彼は受取つたからである。彼が報じてゐる事實と、多くの本質的な問題とに關する論題が偶然的な性質をもち、充實を缺いてゐるのはさうした事情に由來してゐる。直接的な無識から生じた誤りもまたそれに由來してゐる。たとへば彼は柔軟毛皮の十分の一税を「ヤツク」(毛皮現物税)の形態だと考へ、半哥銅貨を一哥銅貨と同一物視してゐるし、デジエネフの發見を「法律的な根拠がない」といふ理由で辯難してゐる、等々。

更に彼はまた前述のやうに學問的訓練の弱さを強く感ぜしめるのであるが、天賦の健やかな思索力は往々さうした訓練の缺如を補つてゐる。たとへば彼は「エデゲルの貢納物についてニコノフスキ年代記略に記述されてゐる數字の過大さ」*を指摘してゐるが、彼の云ふところは今日にいたるまで多くの研究家によつて信を措かれてゐるのである。

* 同上 第一卷序文一七頁。

しかし、方法論的原則の缺けてゐることは往々にして彼の著書を成果のないものたらしめ、また彼の批判的・科學的判断が必らずしも總て確固不動のものではなからしめてゐるのである。

彼の著書の非常にもしろい方面は統計の取扱ひ方である。彼は歴史的著述に統計的研究の方法を加へた最初の一人であるといふはねばならぬ。また彼の報道してゐる後期の統計資料は興味があり且つ重要なものであるが、初期の統計資料にいたつては、全く空想的なものにすぎぬ。彼は云つてゐる。

「西伯利の人口を數字上から觀察することは、判斷の仕事である。といふのは、年代記も、それから今までに知られてゐる古文書もこの仕事の助けにはならぬからである。」

彼自身が告白してゐるやうに「第一期および第二期の時代に西伯利の人口がどれほどで有つたかを突きとめずには濟ますほど冷淡にはなり切れないので、何とかして自分の努力で人口密度を示すところまで探求せずには措けなかつた」のである。が、彼がとり上げてゐるそれの數字の「根據」は科學的にみて間然するところなきものだとは云へない。彼は自分自身の「勘」で僧侶やカザックや官廳の役人の數をさぐり出してゐるのである。

「なぜならば都市はもちろん、櫛^{くし}で僧職のあないところはなかつたし、長官や書記のあない小櫛^{こくし}もなく、また半ダースのカザック十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

三九五

のふいふ場所もなかつたからである。……これこそ三つの身分層を計算する素材であつて、その他の計算は過去のものによつて補つたのである。西伯利の住民が地の下から生えて來たわけではないのだから！」*

* 同上 第一卷八三—八四頁。後世の研究者は好んで彼の統計資料を利用しながらスロフツォフの科學的方法の特異性にあまり注意しない。

だがこれら一切の缺點は、プランの廣さとその新鮮さ、さらにまた視角の正しさと燃犀さ、とくにスロフツォフが自分の取扱つてゐる研究對象にたいして抱いてゐる愛によつて、かなりの程度に補はれてゐる。彼れは西伯利を愛してゐた。そして「この郷土の滑稽なことも悲しいことも胸に抱きあげた」のである。

「この國土の歴史は陽氣なものではない。名譽にたいする希望もなく、才能をあらはす機會もなく、勝利も政治もない混沌然とした道徳腐敗の環境中に冬籠りをしながら、偉大なる世界から追放されてきた者のほか、自分のところには偉大なる世界を見ることもなく、エルロアの寺々のかはりに、ただただ遊牧民族の古墳や岩壁の上に書きのこされた讀みとりがたい碑文のみを相繼してきた歴史である……」*

* 同上 第一卷序文二二頁。

【スロフツォフの西伯利観とその史眼】

かうした歴史は、この感受性の強い西伯利人の一人である著者に多くのことを物語つてゐる。彼の著作のもう一つの特徴はその直接性である。彼は西伯利について書かうと欲したとき「西伯利を限な

く旅行して」* 西伯利を知つたのであつて、書物によつて西伯利を知つたのではない。そのことは隨所に感じられる。彼のものには聰明な老人の善良な觀察眼がある。彼の同郷者たる西伯利の住民にたいする肯綮にあたつた特徴づけがいたるところに見られる。その一例は、たとへば西伯利特有の言語にたいする特徴づけで、それは美事にあたへられてゐる。彼は書いてゐる。

「西伯利人の會話はゆつたりとして冷たい。また輕佻でもなく、驕狂でもなく一つ一つの物を數へるやうに重々しく言葉すくなである。そして遺憾ながら暗い感じをあたへ、動詞を略す習慣によつて思想を生き生きとさせる。エカテリンブルグからトボリスクへ旅行すると、その會話語の甚だしい相異が感じられる。そのために旅行者は郷愁を感じるのである。イルクーツクでは一層の異ひがあり、ロシア本國から遠ざかるほどそれが甚だしい。」*

* 同上 第一卷一六九頁。

* 同上 第一卷六九頁。

スロフツォフは課題を正しく設けたのであるが、彼の有つてゐた資料によつてそれを解決することは不可能であつて、第一源泉による豫備的な仕事が必要であつたといふこと、を彼は明白に示してゐる。

一八八六年（明治一九年）に「西伯利の歴史的鳥瞰」があらたに再版される際にセミョノフスキイは序文を書いて、この書が最初に世にでた時から半世紀の間にこの方面において學問はあまり多く前進

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

してゐないといふこと、舊西伯利局の廣範な資料がまだ未研究のまま残されてゐるといふことを指摘せねばならなかつた。解決を待つところの「非常に重要な問題がすくなくない」と彼には考へられたのである。たとへば

「單に住民人口の稠密な地方だけに限局しない……そして人種や經濟の方面を研究した西伯利植民の歴史……農民の歴史、都市生活の歴史、西伯利カザク社會の歴史、商業、物價、家庭生活の歴史……等々。」

それは本質においてスロフツォフがその著「鳥瞰」を組立てようとして理想したところのプランに他ならぬといふことは容易に窺ひうるのである。

五、ブツィンスキイ教授の西伯利研究

【ブツィンスキイ教授の「初期西伯利植民史」】

スロフツォフが設けた課題を、西伯利局文書の完全かつ全面的な研究を基礎として解決しようとした最初の企てはブツィンスキイ教授によつて、その著「西伯利の植民と初期西伯利移住者の生活」(Жизнь Сибиря и 첫 переезд ее населения) (ハルコフ、一八八九年)のうちで成しとげられた。この研究はその後になつて一八九八年度の「ハルコフ大學紀要」に載せられた諸論文によつて増補

されてゐる。ブツィンスキイの計畫はさきほめて興味あるものである。彼は西伯利の歴史を書くよりも前にまづ西伯利を形成してゐるそれぞれの郡の全面的なモノグラフ的な研究が必要だといふ結論に到達したのである。彼が出版した著書は、ウエルホトゥルスキイ、トゥリンスキイ、チュメンスキイ、トボリスキイ、ケトスキイ、およびマンガゼイスキイなどの諸郡の「この地方占領の初期からミハイル・フョードロヴィチ帝の治世にいたる」時代までの、さうした豫備的著作をつくり上げることに成功してゐる。彼の考へは根本において正しい。が、これら諸郡に關する廣汎な時代の歴大な保存資料を詳細に研究するといふ大きな課題が一人の研究家の力に餘ることは明白である。だから著者は多少とも徹底した調査研究を成しとげることには成功せず、彼の手に與へられた文書資料を汲み盡すといふことをせずに、ざつと文書を散見してその中から一部分をとりあげ、標本的なそして偶然的な引用にとどめてゐる。――要するに豫定された課題を完遂しなかつたのである。個々の郡の研究といふことのかはりに、郡の生活のいろいろな方面に關する抜書的な報道といふ結果に終つてゐるのである。そのうちへ歴大な著作を急いでやつたので研究材料の本質に綿密な注意をもつて入りこむことが出来なかつたといふことも附け加へねばならぬ。源泉にたいする充分嚴格な批判的態度が必らずしも常に保たれてをらず引用の不用意が見られるのはそのためである。また原文の讀み方の不注意から来る

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

誤まりが稀でないのも右の事情に由来すると云はねばならぬ。最後に、個々のばらばらに分散してゐる難然たる諸資料を統一して一つのものに纏めあげる目的をもつてゐる諸章においては、全體的な史眼の薄弱さと構成の初歩的なこととどろかされるのである。

右に述べるやうな多くの缺點をもつてゐるが、ブツィンスキイ教授の著書と彼の諸論文は西伯利史研究の仕事を一歩前進せしめたものである。そのほか、彼はこの研究において本質的に正しいプランを豫定し、今まで世に出てゐた材料を生かし、また全然あたらしい古文書資料をそれに加へ、かくし彼のモノグラフィのうちで他の部分にくらべて最善のものはマンガゼイアに關するものである。西伯利のこの一隅それ自身が他の部分から特別に興味あるものであり、またその生活や風俗に關する資料が豊富だからであるかも知れぬ。さうした資料の新鮮さはブツィンスキイの研究を西伯利史研究上に不可欠な參考書たらしめてゐるし、また彼の學問的活動の空白や、彼の學問的思索の若干ナイーヴな點を忘れしめるのである。

【オグロブリン教授の「西伯利局文書總覽」】

その後の西伯利史の整理は、一八九五年——一九〇一年にわたつて出版されたエヌ・エヌ・オグロ

ブリン編「西伯利局文書および書籍總覽」(Описание созданных и книги Сибирского Приказа)によつて、現在では容易となつてゐる。この「總覽」は舊司法省に保存されてゐた西伯利史關係のあらゆるべき膨大な文書の集積を實際において學問のために開放したもので、將來の研究者のために西伯利局古文書の迷宮中における導きの糸となるべきものである。「總覽」の編纂に忙がしかつたオグロブリン自身は長い仕事の間に獲得した該博な知識を利用することができず、彼みづからの言葉をかりて云へば「ちよつとした序でに」學術雜誌の論文で多くはあまり重要ならざる個々の問題について書いてだけであるが、その代りに彼は他の人々のために眞面目なそして體系的な、西伯利史の研究を可能ならしめたのである。

六、二十世紀初における西伯利研究の課題

【ゴロワチラの西伯利史研究總論】

十六世紀および十七世紀の西伯利關係古文書資料の多様性と大量性を示してゐるオグロブリンの「總覽」の出現は、西伯利史編纂の目的と方法の問題を新たに緊急なものとならしめた。

「西伯利の歴史的研究所の當面の課題」については、一九〇二年——一九〇五年にわたつて「文部省雜

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

誌」に掲載された諸論文のなかでゴロワチョフが形態づけを行つてゐる。

四〇二

*「文部省雑誌」一九〇二年第九號「西伯利史研究の當面の課題」同「一九〇五年第一〇號「十七世紀の西伯利各市史料集の編纂」

しきタイプ」

これらの課題は彼によれば次のこときものである。

第一に研究されねばならぬものは「西伯利邊境地方のいかなる過去によつて惹起されつつある複雑にして困難な各種の問題」

「人侵入前の西伯利の歴史的使命」であつて、それは「尙ほまだ謎の解かれてゐない未整頓の寶である。」と彼は云ふ。

第二は「西伯利年代記の問題」であつて、彼は根拠ある理由によつて、それが解決されたとするには尙ほ前途遙遠だと考へてゐる。

第三に「その内容によつて注目されるべき時代（十七世紀）を後世の人々に再現し、あまり人眼にたなぬ看落されやすい人民生活の有機的な諸過程をこの時代の生活のすべての現象のうちに丹念に追及すること——これこそ至難であるがそれとともに感謝に値する歴史科學の任務である。」といふのは、この場合における邊境の歴史はロシア一般の歴史の解明に貴重な貢獻をもたらすものだからである。

「これらの問題は現在まづたく荒謬とした空白となつてゐる西伯利史の最も重要な諸章であると云ひうる。そこには雖然とあらゝに置かれた煉瓦の堆積すらもない——われわれが見いださうのは最初の原料、素材にすぎぬ物であつて、それから新しく煉瓦を作りあげ更にまたその煉瓦から將來建築物そのものを組立てて行くことの出来る物であるにすぎぬ。」

ゴロワチョフはかうした稍やわざとらしい氣どつた表現をもつて、西伯利の歴史に關する個々の問題の豫備的なモノグラフィ的な整理が必要だといふことを強調してゐるのである。彼はまたさうした緊

急問題の綱領を例示的にあげてゐる。

一、西伯利の移民に關する問題は云ふまでもなくこの邊境地方を研究するための土臺石となるべきものである。

その根本題目を彼は次ぎのやうに數へあげてゐる。

(イ)古文書中にある「農業、人民的植民に關する貴重な材料」を整理する必要がある。

(ロ)西伯利の流刑囚植民はこの地方の歴史上の大きな問題であつてしかも今日までごく不十分にしか整理されてゐないところのものである。

(ハ)野獸狩獵者の植民的役割はおなじく研究家の留意に値すべきものである。

(ニ)この地方の植民事業における西伯利修道院の役割はやはり今なほ研究者の手が及ぶことを待ちこがれてゐるものである。

(ホ)軍人官吏の植民は主として外間的な最も大きな出來ことを事實方面から總結的に示されてゐるだけである。たとへそれがごく典型的な事例であつても小さな事例は今尙ほ蔭の方に手がつけられずに残つてゐる。

二、西伯利の植民と密接な關係のある廣範な異民族問題がいままで未解決のまま横はつてゐる。これは單に西伯利のみならず全ロシアにとつて全く難問題中の一つである。

三、財政的統治の諸問題および十七世紀末並に十八世紀初における商工業運動の歴史、とくに古代西伯利のプハラその他の中央アジア諸汗國との通商交渉に關する問題を研究を要するものである。

四、軍務知事廳の諸文書の細密な研究からは必ずしも多くの獨立的なものが發見されねばならぬ。

かくて前述諸問題の主として古文書資料を基礎とするモノグラフィは——西伯利史研究に努力する者の直接的な課題である。

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

四〇三

二十世紀の初までに開明されたところによれば、西伯利史編纂學上の當面の課題は右のごときものである。豫定として課された問題の將來の整頓に主要な役割をもつべき者は、むしろ西伯利みづからであつて、とくに新らしく誕生したイルクーツク大學である。セミョノフスキは夙に一八八六年に書いてゐる。

四〇四

「西伯利學」一般、とくに西伯利史編纂學の發展における最善の刺激は疑ひなく一日千秋の思ひで待望されてゐる西伯利大學の開設である。……遠いロシアの邊境におかれる大學は、西伯利といふ名をもつこの獨目の世界の必須緊要な研究のために多くの働き人を供給するであらう。*

「西伯利文庫」Gut. Ogor. / 八八六年、第三輯。

【オホドニコフ教授の「西伯利史概説」】

この領域における若きイルクーツク大學の最初の經驗はオホドニコフ教授の「十九世紀初までの西伯利史概説」*Историческое изображение Сибири по сведениям XIX в.*であつて、「ロシア民族侵入前の西伯利」を取扱つてゐるその第一巻は、一九二二年に出版された。*

獨立的な研究を目的として課してゐないこの著書は、從來の諸著作の成果を統合してこれを體系化し、そして最近の科學的探究の照明において、西伯利史學の向ふべき方向を示さうと意圖したものである。この書は「すべての科學的な西伯利史編纂物に總決算」をあたへると共に、ミルレルおよびカス

・ロフツォフの諸著によつて礎石をおかれた西伯利の歴史的研究に捧げられた諸著作物の、連鎖の最後の環である。

* 第二巻は「ロシア人による西伯利の占領と植民、西伯利におけるロシア人および異民族の状態、十六世紀—十七世紀の州政および西伯利一般社會の生活と風俗の描寫」に充てられることとなつてゐる。この第二巻中の一つの章は「十六世紀—十八世紀におけるロシアの國家權力と西伯利の異民族」なる表題で、獨立した論文の形で出版された。この論文を補つて一九二二年に別の論文「西伯利における異民族叛亂の歴史より」が出た。同じ一九二二年にオホドニコフの小冊子「西伯利征服の歴史より（ニカギルの地の征服）」が出たが、これは彼の研究題目と全體的連繫をもつものである。

十八世紀以降の西伯利史編纂の潮流

西〇五

譯者補註

〔一〕最初にロシア人が「シビリ」と呼んでゐたのは、今のトボリスク市の稍や上流、イルトゥイシュ河畔に在つたクチュム汗の居城「イスケル」の地であつた。エルマクの遠征と西伯利汗國の没落後、クチュム汗の領地であつたイルトゥイシュ、トボール、タウダ諸河の流域がロシア人によつて占領された十六世紀末頃にはその地方全體が「シビリ」と呼ばれるやうになつた。その後ウラル以東の地が逐次に征服されてロシア帝國の新領土の中へ併呑されるとともに「シビリ」といふ地名がそのまま自然に太平洋岸までひろがつて行きそして現時のごとき東西は太平洋岸からウラル山脈まで、南北はカスピ平原の北境、アルタイ山脈、蒙古、滿洲、朝鮮の國境線から北氷洋にいたる廣大な領域（千三百軒平方）の地理的總稱となつた。従つて「シビリ」といふ地理上の概念は、歴史とともに變化してをり、最近でもロシア人の間では實生活ではもちろん稀に學術的な文獻や公文書の上でさへ混雜して取扱はれてゐる場合がある。本書のなかで著者が研究の對象としてゐるのは廣義の西伯利全體であるが、古文書その他の引用では「西伯利」といふ言葉がウラル山麓やイルトゥイシュ、オビ河畔の狭い地域を意味してゐる場合が多い。「シビリ」の語源についてはロシアの學者の間にいろいろな異説があり定説はない。ロシア語の「セーヴェル」(北)の轉訛

譯者補註

とするもの。蒙古系西伯利民族の間に傳承されてゐる國民詩のなかの北極光を象徵する山嶽の名「シェビ
ル」「スンプイル」「スイマイル」等から出たとするもの（北極光の中で天兵の戦闘が行はれてゐるといふ
西伯利タール族の傳説については譯書の第三篇三一九頁に記されてゐる）。遠い古代に故郷をすてて南
方へ去つたウグロ・フィン族の一種「スイマイル」または「スイヴィル」の族名に由来するとするもの。
またラシット・ア・デンその他の元朝時代のアラビア史家の書中に散見される「イビル・シビル」がすなは
ち「西伯利」のことであるとするもの等々。（シビリの語源についてはオゴロドニコフ著「西伯利史概説」原稿第
一卷、其他に據る）この最後の説はバルトリド氏も採用してをり「蒙古人の時代には支那の蒙古史（元史）
にもラシット・ア・デンにもシベリアのことイビル・シビリの名で記されてをり」（『東洋研究史』外務省
調査部譯三七四頁）と述べてゐる。しかし乍らいづれの説も今日まで確定的なものとされてをらぬ。ヨ
ロッパ人の報道文獻の中では十三世紀中葉に蒙古を訪れたブラノ・カルビニが、蒙古軍が「サモエド」の
國まで侵入したことやサモエド族について書いてをり、ルブリクやマルコ・ポーロも明らかに西伯利と思は
れる地方のことを述べてゐるが、彼らはいづれも傳聞によつてゐるのであり、且つ「シベリ」といふ地名
はあげてをらぬ。しかし十七世紀初に永くモスクワに滞在したオランダ商人イサク・マテサの西伯利に關
する報道中には「オビ河畔にシベリアとよばれる州があり、その州のうちにはシベルの町がある」とはつ
きり記されてゐる。（アレクセエフ著「外國人旅行家・文筆家の報道における西伯利」原稿第一卷）ロシアの公文書

の上ではイワン雷帝が一五五四年にイギリスのエドワード四世に送つた親書に「全ルウシ及び西伯利のツ
アーリ」と自ら稱してをりその時代から「シベリ」といふ地名が常に用ひられはじめてゐる。

わが國では新井白石が「采覽異言」（正徳三年一七一三年）や「西洋紀聞」（正徳五年）を書いた頃に
はまだ「西伯利」の地名はあげてをらず、「モスコビヤ」の記事のなかで西伯利のことが混同して扱はれて
ゐる。北邊問題がやかましくなり工藤平助の「赤蝦夷風説考」や林子平の「海國兵談」などが出た安永天
明の頃になると長崎の通詞吉雄幸作がロシアの遣支使節ランゲ（譯書一九六頁、補註八三）の旅行記「支
那聘使記」を蘭書から邦譯してゐる位で一部の間では西伯利のことが相當に知られてゐた。日本人にして
西伯利を旅行し、詳細な報道を最初に齎したのは、寛政四年（一七九三年）露使アダム・ラクスマンに
送還された伊勢白子の漂流民光太夫、磯吉ら（『北越聞略』）但しこの本ではヤクツク以東を西伯利としてゐる）で
あるが、稍やおくれて文化元年（一八〇四年）露使レザノフに送還された仙臺漂流民津太夫、小平らは「此
總州都のかたなるトボリツカ及び加山（カザン）と云ふ所より東北の方ブライツケ（今のブリヤト自治共
和國地方）ヤコウツカ、オホーツカ、カミシヤツカ等の諸地に至るまで數千里の間の總名をシベリ（止白
里）と申候。」（『環海異聞』「石井徳富編『漂流奇談全集』四五七頁）と述べ、既に現在と略ぼおなじ西伯利の地
理的概念を正確につかんで傳へてゐる。また「環海異聞」の編者大槻茂實は序例附言に「百有餘年來、彼
土に賓主某なる人興りて、諸國を懷け、服従せしめ、其東北方亞細亞洲止白里（支那體）の諸大國共迄を併

譯者補註

三

せ、其盡地カミシャーツカに至る迄従へて、近時我東北の蝦夷諸島にも、其人來往す。」(同上、三九四頁)
 とロシア人の西伯利征服の歴史に言及してゐる。わが國初代の駐露公使榎本武揚は明治十一年(一八七八年)馬車で西伯利を横斷、アムール、ウスリー兩河を舟航ウラヂヤストークから歸國してをり、知識人にして西伯利を旅行した最初の日本人であるが「八月八日快晴。五時五十分(エカテリンブルグを)發程。ス。秋冷襲、神氣殊王、行クコト十一ウ。ホルストニテ路ノ左側ニ煉瓦石ノ柱二尺五寸角長サ十五尺許ノ目標アリ、此處ヨリ先キハ「トボリスク縣」ナリ。晝休ノ小驛ニテ役人ヨリ聞クニ此標石コン歐羅巴ト亞細亞ノ境即チ眞ノ「シベリア」ナルヲ表スルナリト。此ノ説ハ「エカテリンブルグ」府市正ノ口上ト差アレドモ「ウラル」嶺ヲ以テ歐亞ノ境界ト爲スハ世界一般地理上ニ於テ認ムル所ニ係リ而シテ本目標石ノ處迄ハ「ベールム」縣ノ管轄タルヲ以テ魯政府ノ定メニハ此ノ表石ヲ以テ「シベリア」ト歐羅巴トノ境ト立テタル者ナル可シ。」(「シベリア日記」滿鐵弘報課版四五一四六頁)と云つてゐる。十九世紀初以來西伯利を東西二つの行政區劃とし、ソヴェト時代になつても東部西伯利、西部西伯利等の行政區名があつたが現在に廢された。

(二) 西伯利最近の總人口は約一千五百萬人(一九二六年の人口調査では一千三百餘萬人)と稱され、各種原住民族の總數はカザクスタン共和國領の西伯利に住むカザク族約百萬人を加へておよそ二百二十五萬人であり、その他は全部ロシア人を主とする移住民である。西伯利人口の半數以上はトボール河上流からエニギイ河上流にいたる西部西伯利の鐵道沿線附近に集中され、大體において鐵道沿線から離れ、北また

東に向ふにしたがつて人口密度が稀薄となつてゐる。十七世紀以來の西伯利の人口増加狀態は次の如くである。

年次	原住民	ロシア人其他の移住民	計	増加率
一六三二年	一七三、〇〇〇	一三、〇〇〇	一九六、〇〇〇	一〇〇
一七三七年	二二〇、〇〇〇	一九七、〇〇〇	四一七、〇〇〇	二六九
一八五八年	六四八、〇〇〇	二二八、〇八六	八七六、〇八六	一、四九八
一八九七年	八七〇、五三六	四、八八九、六三三	五、七六〇、一六九	二、九三八
一九二六年	二二五、〇〇〇	一〇、九九七、二〇〇	一二、二四七、二〇〇	六、七五八

(但し一九二六年以前の統計には前述のカザク民族は含まれてゐない)

ソヴェト政權時代になつて最初に行はれた一九二六年の人口調査においても西伯利原住民族の正確な統計調査は困難とされた。ここに示されてゐる初期の原住民族の統計がほとんど實際に即せざるものであることは想像に難くない。個々の西伯利原住民族中にはロシア人の征服以來その人口が年々急激に減少しつつあるものが多く、この統計に現はれてゐるごとき原住民族の増加率は實際とは遙かに遠いものとせねばならぬ。また初期の西伯利原住民族統計には毛皮税を貢納する歸順原住民族男子の數だけが計上されてゐたといふ事情に留意する必要がある。西伯利貫通鐵道がウイッテの計畫によつて建設に着手されたのは一八九一年であり、西部西伯利鐵道の運輸が開始されたのは一八九五年である。一八五八年の人口統計と一八九七年

譯者補註

五

の人口統計との四十年間における急激な移住民数の増加はこの鐵道建設に負ふものであり、第一次世界大戦にいたるまでの西伯利植民の躍進的な發展は、十九世紀末以降の大規模な移民計畫を基礎としてゐる。西伯利植民の初期におけるロシア移住民の人口統計が正確な事情については第三篇三九五頁参照。

〔三〕アレクシス・トクヴィル（一八〇五年—一八五九年）フランスの政治家・歴史家。急進主義者の敵とされナポレオン三世のクーデター後自分の領地に隠退して歴史の著述に専念した。主著「アメリカにおけるデモクラシー」。

〔四〕ワシリー・オンボヴィチ・クリュチエフスキ（一八四一年—一九一一年）モスクワ大學歴史學の教授。ロシアの有名な歴史家ソロヴィヨフの弟子。一八八二年に研究論文「古代ルシの貴族會議」により學位を得た。ロシア古代史に關する多くの發見があり、大學における彼れのロシア史の講義は文學的な講義によつて人氣をあつめた。「ロシア史教程」五巻は古典的價值をもつものとして英、獨その他の外國語に翻譯されてをり、日本では現在外務省調査局において邦譯進行中である。

〔五〕現在日本語となつてゐる古代ロシアにおけるフィン族とスラヴ族の歴史的關係につき參考すべき文獻はボクロフスキイ著「ロシア社會史」（外村史郎譯）同「露西亞史」（岡田宗司譯）がある。クリュチエフスキイについては補註〔四〕参照。

〔六〕大ノヴォロド國家は十世紀から十五世紀まで存在し、蒙古軍のロシア侵入時代には劫掠をうけず、十

二世紀以來プスコフ市とともにロシアにおけるハンザ同盟商業都市として發達した。特に十四、五世紀にロシア産毛皮の西歐への輸出を獨占して繁榮の頂點に達し、白海、バルチック海、ヴォルガ上流、ウラル山麓地方に廣く植民地をもつてゐた。名目上の統治者として封侯がおかれ、「ウエチエ」と稱する市民の總會があつたが、商業的繁榮期には大商人と金融業者が實際上の政權を握つてゐた。モスクワ侯國の勃興とともに兩者のあひだに植民地の爭奪戦争がおこはれた。一四七八年モスクワがノヴォゴロドを占領するとともにモスクワ國家の勢力はノヴォゴロドの占めてゐた西歐との貿易權や植民地をその手に收めて急激に伸長しはじめた。ノヴォゴロドの古市はいまのレニングラド州ヴォルフ河畔にあつて最近人口三萬二千人の小都市となつてゐる。

〔七〕「暗の國」「ユグラの國」「サモエチの國」がノヴォゴロドのロシア人とはばかりでなく古代からヴォルガ中流地方にあつたボルガル國を通して南方との毛皮貿易を行つてゐたことは多くの文獻に記載されてゐる。マルコ・ポーロの父ニコロと伯父マツフェオがイスタンブールから寶石をたづさへて當時ヴォルガ河畔の支配者であつたバルカ汗の帳幕を訪れたのも「暗の國」からもたらされる高價な毛皮を手に入れるためであつたと云ふ。（シュクロフスキイ著「マルコ・ポーロ」原版一九三五年刊）「ユグラの國」すなはち「ユゴリア」が現時のどの地域にあたるかについてはロシアの歴史家の間に異論があつた。（たとへばヘルベルシュタインの報道の註釋についてサムイスロフスキイとクリュチエフスキイ）バフルーシン教授はノヴォゴロド

譯者 楠 註

七

八
人の「ユゴルシチナ」とその産業組合の講元であつたトイツァ寺院との關係から「北部ウラルの斜面」と斷じてゐる。十六世紀中葉にモスクワに滞在してゐたオーストリー王の使節ヘルベルシュタイン「(五)參照」は「この州はカマ河の向ふにあつてベルミおよびウヤトカと境を接し……タタル人シフ・マヤイが支配してゐる。住民の産業は栗鼠の毛皮で、他の國のものより美しくい」(アレクセフ前掲書)と報道してゐる。「ユグラ」の住民であつたフィン・ウゴル系の民族はサモエド族と同様にロシア人の西伯利征服とともに急激に人口が減少していつた。現在尙ほ主としてツンドラ地帯を遊牧してゐるサモエド族の總人口は二萬人以下(一九二六年人口調査)である。譯書第二篇に詳述されてゐるやうにロシア人の西伯利侵略の初期にはげしい反抗をしたサモエド族の数は當時かなり多數であつたと思はれる。たとへばオビ河口へ派遣されたイギリス探検隊の船長ヨシアス・ロガンは「一六二一年七月廿四日附のハクルートに宛てた手紙で「冬になるとアストゼルス・ヘン千人からのサモエドが自分たちの商品「毛皮」をたづさへて集まつてきますが、その中には想像もつかぬやうな素晴らしいものがあります」と報告してゐる。(アレクセフ、前掲書)

【八】ロシア語の「ヤサク」といふ言葉はもと蒙古語の法律、法典を意味するヤサク(札撒克)からでたものであるが、ロシアでは専ら異民族に課せられる「貢納」もしくは毛皮現物税のことである。毛皮の獵獲が減少した地方では次第にヤサクが貨幣税に轉化していつた。蒙古の「ヤサク」のことについてはリファサ

ノフスキイ教授「蒙古慣習法の研究」(東亞經濟調査局譯)に詳述されてゐる。

【九】近代の一般的な意味ではロシア語の「ゴロド」といふ言葉は郡縣州の主府またはそれに相當する都市のことであり、「ゴロドク」はそれ以下の地方的小都市のことである。しかし本書のなかで述べられてゐる、ロシア人が西伯利の植民過程において異民族の襲撃をふせぎ、その地方の占領征服を確保するため、據點として逐次に建設して行つた「ゴロド」は、砦櫓のなかに守備隊とともに住民の部落をも包括する城砦市邑のことである。これと同型の施設にたいし譯書では次ぎのやうな譯語を用ひることとした——ゴロド(砦市) ゴロドク(小砦市) オストログ(櫓) オストロジエク(小櫓) ジモヴィエ(冬營所) クレボステイ(要塞)等。これらのいろいろな施設は規模の大小やその性質によつて一々はつきりと區別した呼稱があたへられてゐる。砦市や櫓を中心にして初めはその外壁内に、その後占領地方が平定されると次第にその周圍に人民のセレニエ(部落)ができそれが將來の都市や町として發達していつたのである。ロス・トフスキイ著「ロシア東方侵略史」のシベリア征服の章にはこの「ゴロド」(邦譯書では「城砦」とされてゐる)の構造や任務について次ぎのやうな説明がある。「かかる城砦の典型的なものはロシアによる征服の初期、即ち一五九四年に建設されたタラの城砦である。その構造を述べれば本丸は防禦用の塔を有する九十八ヤード平方の木造壁をめぐらし、その内には教會、知事の住所、火藥庫および倉庫があつた。これを圍んで千四百フィート平方の外壁があり、内壁との間には住民の丸太小屋があつた。城砦の守備隊は六

譯者 楠 壯

九

十人のカザックより成り、彼等の任務は城砦の防禦のみならず延長約二百五十マイル、幅四百マイルのペ
ラビンスキイ平原全體に亘る警備であつた。……治安維持は火器の威力が土民に與へた精神的効果による
ところであつたから城砦には大砲を充分に裝備してゐたが往々遊牧民の侵す處となつた。(生活社版邦譯
書三八三九頁)

〔一〇〕現時のコミ(ズイリヤン)自治共和國及びコミ・ペルミヤク民族區地方に住むフィン族群の一種で
最近の人口は二十二萬六千餘人、いまでは大部分が定住して農耕または狩獵をいとなんでゐる。

〔一一〕オスチヤク族はフィン族群に屬し最近の人口は或る資料では約九千人、ソヴェト小百科事典一九二六年
調査となつてをり、他の資料では二萬三千三百〇六人、數字に現はれた聯邦共黨黨の民族政策一九三〇年刊
となつてゐる非常な差がある。本書に引用されてゐる各種の古文書の記述から判斷してロシア人の西伯利
侵入當時にはウラルを中心にもつと多數の人口を擁してゐたやうである。この民族はいまでも河川の流域
で漁撈や狩獵を専らとする半遊牧生活を送つてゐる。

〔一二〕モスクワがカザン汗國を占領征服したのは一五五二年である。これによつてモスクワはカマ河を經
てウラルにいたる、またヴォルガ河を越えて中央アジアにいたる交通路を確保することとなり、貿易産業
上急激な發展に動機をあたへられることとなつた。

〔一三〕「傭兵カザックの遠征」といふのはエルマクの遠征(一五八一年頃)のことである。ストロガノフ家

の祖先はノヴォゴロド市民でノヴォゴロド没落(註六)参照)のころモスクワ大侯に取り入つてウイチエグダ
地方で製鹽所を起して致富し、イワン雷帝からカマ河畔、ペルミ、スイルワ河、チュソワ河などの沿岸で
産業上の特權を與へられ、私領植民地を設け、カザックを傭入れて近傍の異民族を征服し、ロシア國家の
西伯利征服事業の先驅者として大きな役目を果たした。ストロガノフ家の一族は帝制時代には「西伯利の
王」と稱せられ十九世紀中にロマノフ朝廷と婚姻關係をもつてゐた。ストロガノフ一族の西伯利における
植民活動とエルマク遠征の關係については譯書の第二篇、第三篇に詳述されてゐる。

〔一四〕ハンザ同盟の隆盛期は十三、四世紀および十五世紀の前半であつてノヴォゴロドの發達と没落はハン
ザ同盟の盛衰と密接に結びついてゐる。註六)参照。

〔一五〕シギスムンド・ヘルベルシュタイン(一四八六年—一五六六年)はオーストリア使節として二回(一
五一六—一八八一年および一五二六—一五二七年)モスクワに滞在した。その間に蒐集した資料を基礎とし「モス
クワ國誌(一五四九年刊)を書いた。その著書中に翻譯挿入されてゐる「ロシア道路書」の原稿は今日ロ
シアに傳はつてをらず、西伯利に關する記述とともにロシア歴史家の間で貴重な史料とされてゐる。

〔一六〕ブハラとヒワから最初の使節をモスクワへ伴てきたのはロシア人でなくそのころモスクワに新設
されたイギリス貿易會社「モスクワ商館」の支配人アンソニー・ジェンキンソンである。イギリス人がロ
シアへの海上航路を發見した動機は、一五五三年にオビ河の河口から通航して支那にいたる新交通路(そ

譯者補註

のころイギリス人は海上を支配するポルトガル人やイスパニア人の妨害なしに支那へ行く交通路を頻りに探求し、オビ河の上流は支那に接近してゐると考へてゐた。を發見する目的でウィロビーとチャンスラアを指揮者として、三隻の探検船隊を派遣したのはじまる。船隊は途中で暴風に逢ひウィロビーの船は沈没したがチャンスラアの船は白海に漂着し、モスクワ政府から歡待されて英露海上貿易の端を開くこととなつた。「モスクワ商館」の最初の代表者ジェンキンソンはモスクワから陸路中央アジアを経て支那へ行かうと企てたが、ブハラとヒワに到達したときマルコ・ボロの時代と違つてこの地方と支那との通商路が全く杜絶衰微してしまつてゐるのを見て兩汗國の使節を伴つて一旦モスクワへ引返し、そして中央アジアを介してペルシアとの連絡に成功した。ジェンキンソンが英譯してイギリス人の興味を西伯利へ惹きつける動機となつた「珍奇な人間の話」については補註〔二〇〕参照。

〔一七〕デイルス・フレッチャー（一五四九年—一六二一年）エリザベス女帝の使節としてフォドル皇帝のもとへ派遣され、一五八八年から翌八九年までモスクワに滞在し「ロシア皇帝の統治と人民の風俗」を書いた。この書には西伯利のことと記述されてゐる。

〔一八〕この時代にイギリス人が勝手に西伯利へかけて毛皮を買占めるのをイワン雷帝が怒つてイギリス商人を逮捕させた。一五八四年にイギリス使節イェロメイ・ボウスがイワン雷帝に向つて西伯利の河々へイギリス人が自由に旅行する特許を要請したのに対し、皇帝は「彼地には客人の滯泊する場所はない。そ

こでは黒貂と狩獵用の鷹が産するばかりである。黒貂や鷹のやうな高價な商品がイギリスへばかり持ち去られるとしたら、わが國はそれ無しにどうしてやつて行けようぞ」と拒絶した。（オクウニ著「カムチャツカ植民政策史」原載九頁、「ロシア歴史協會文集」三八巻より引用）

〔一九〕フォドル・イワノヴィチ帝（一五五七年—一五九八年）イワン雷帝の子。一五八四年即位。

〔二〇〕「珍奇な人間の話」は、西伯利發見の初めにロシア人や外國人がこの地の原住民の生活習慣に對し、かに荒誕無稽な觀察をし、それがまたいかに當時の人間の興味を惹いたかといふことを物語る資料としておもしろい。アレクセエフ著「外國人の報道における西伯利」第一巻にはその拔萃と詳しい註解が載つてゐる。

「ネゴルの國の向ふの東の方の海上にサモエヂとよばれる人間が住んでをり、そこはマンガゼイアとも呼ばれてゐる。彼らの食物は鹿や魚の肉であるがまた自分たち同志を互ひに喰ひ合つてゐる。そしてどこからか客人がやつてくると彼らは自分の子供を殺して客をもてなし馳走をする。客人が彼らのところで死ぬと土中へ埋葬することはせずそれを喰つてしまふ。自分たちの仲間のあひだでもその通りである。この人は背が低く顔が平たくて鼻は小さい。敏捷で弓を射るのが上手で走るのがおそろしく早い。馴鹿や犬に乗りまはり、黒貂や鹿の毛皮を着てゐる。彼らの商品は黒貂である。この國にはこの人間の住んでゐる所からものと先きの方の海上に別のサモエヂが住んでゐる。彼らは夏は海中で暮らし陸上では暮さない。」

譯者 補註

一四
の季節に陸上で暮らすと彼らのからだはひび割れるので水の中で暮らしてゐるのだが、陸岸にあがることはできる」云々。サモエド族が古代において食人種であつたといふ説は一般に否定されてきたが、アレクセフ教授の註解によると最近ではまた人種學者の間で古代西伯利民族の口碑傳説中に食人種的な要素のあることが指摘されてゐると云ふ。

西伯利奥地の原住民に關するお伽噺のやうな珍奇な想像説がロシア人の間で傳へられてゐたことはヘルベルシュタインの報道にもある。オビ河の向ふの山中にルコモリア人といふのが住んでゐる。彼らは蛙のやうに十一月末になると死に、翌春になると生きかへる。この民族は近隣の民族との間に、ほかの國では聞いたことのない珍らしい交易をやつてゐる。死ぬ季節がくると一定の場所へ物資を置いておく。すると隣りの民族がやつてきて代物を置いてそれを持ち去る。生きかへつたとき、その代物が少ないと更にあらためて要求する。そのことから争ひがおこり戦争になることもある。ルコモリアの先きにタヘシ河といふ河があり、その河の向ふには不思議な姿をした人間が住んでゐる。或る人間は野獸のやうに全身が毛で包まれてゐる。また或るものは犬の顔をしてゐる。また他の者は頭がなくて胸に顔がついてゐる。このお伽噺のやうな人間のことを確かめようと思つてモスクワでいろいろな人に訊いてみたが、自分の眼で親しくそれを目撃した人はいない。しかも彼らは實際その通りだ、と確言した。アレクセフ、前掲書、二二二頁は鹽貿易や毛皮を身にまとふた原住民の風俗を言語の充分に通ぜぬ異民族の口を通して傳へたロシア人の想像によつて作りあげられた西伯利原住民の生活が語られてゐるのである。

〔二二〕一五四二年ウエストファルに生れルドルフ二世の外交官となつたシュタデンは、ロシアに十二年間住んでゐるうち六年間イワン皇帝の帝領地の管理人となつてゐた。彼は當時の典型的な冒險家の一人で、帝領地の守備隊を指揮し、手兵をもつて近傍を荒し廻つたため人民から訴へられて罷免され、モスクワを去つて北ロシアへ行き毛皮貿易などに手を出し、外國船にのつてロシアを去つてからオランダ、ドイツ、スエデン等を遍歴しウラル北部の占領計畫なども企てた。

〔二三〕チエレミス族はフィン・ウゴル系に屬し現在マリイ族の名でよばれてゐる。ヴォルガ中部のマリイ自治共和國を中心として住み、同共和國の人口四十九萬人中の五一%餘を占めてゐる。ソヴェト聯邦の諸民族中もつとも死亡率の高い衰滅しつつある民族とされてゐる。

〔二四〕一五五五年にモスクワへ來たエチガル汗の使節は、その國には三萬七百人の「下民」がおり、汗は毛皮税として一人當り一枚の黒貂を貢納すると約束したが、その後ロシアの使節に伴はれてきた西伯利汗の使節ボヤングは七百枚の毛皮しか持つて來なかつたのでツァリから追放され、一五五七年には新しい使節が千百六枚の黒貂の皮をもたらし且毎年貢を獻すべきことを約束したが、これも完全には果されなかつた。(バルトリド「東洋研究史」三六三頁)

〔二五〕「カシユルイク」はクチュム汗の居城のあつた「イスケル」城市の別名で、ロシア人が最初に「シビ

譯者補註

一五

一六
リ」とよびなした所である。「カシユルク」といふ地名はレミョゾフの年代記中ではじめて用ひられ、その典拠は不明とされてゐる。

〔二五〕イワン三世（一四四〇年—一五〇五年）一四六二年即位。金帳汗國の分裂に乗じてクリミヤ縫祖侯を懐柔して蒙古人の羈絆を脱し、ノヴォゴロドを併合し、モスクワ國家の基礎をかためたこの皇帝は蒙古人、縫祖人その他の異民族の間にはゆるい以夷制夷政策と懐柔政策とを巧みに行つて成功し異民族外交の傳統をロシア國家にのこしたのである。

〔二六〕トボリスクはロシア人の西伯利征服の最初の根據地で、十六、七世紀を通じて西伯利總督はここに在任した。西伯利鐵道の建設後、沿線から北にそれるため衰微し現時の人口は一萬八千人である。クチュム汗の西伯利汗國没落とともロシア帝國の西伯利發祥の地とされてゐた。ロマノフ朝最後の皇帝ニコライ二世が一九一七年秋から一八年春まで幽閉されてゐたことにより歴史的な悲劇の町である。

〔二七〕現在ヴォルガ下流にカルムイク自治共和國を形成してゐるカルムイク族は西蒙古のカルムイク族と同族である。この民族は十七世紀にオビ河、イルトゥイシユ河の上流地方からいまの地域へ分裂移動した。ソ聯邦内に住むカルムイク族の最近の人口は約十三萬人。外蒙、新疆等に住むカルムイク族は約四十萬人とされてゐる。

〔二八〕一五五五年にモスクワに迫つてイワン雷帝を戦慄させた有名なクリミアの縫祖侯とは同名異人。

〔二九〕バシキル族は十六世紀の後半、まだ西伯利汗國がエルマク遠征により没落せぬ前からすでにストロガノフ家の手で植民地化されてゐたウラル南麓地方に住んでゐた。西伯利諸民族のなかでもつとも早くからロシア人の侵略征服を受けたこの民族は十七世紀初以來いく度か叛亂を企てた。古くからウラル鑛山地方の開発に使役され一七七三年—七四年のプガチョフ叛亂の際には全民族こぞつてこれに参加し多數の人口が剝滅された。ウファ市を首府とする現時のバシキル自治共和國内に住むこの民族の人口は同共和國の總人口二百七十萬人中二三・六％で、移住民であるロシア人の三九・七％よりも遙かに少なく、タタール族の一七・二％より稍や多いといふ状態で、その民族の郷土において今日ではロシア人植民の波に完全に併呑されてしまつた形である。ソ聯邦内バシキル族最近の總人口は約七十一萬人（一九二七年調査）である。

〔三〇〕セミョン・レミョゾフ。「西伯利地圖」「トボリスク年代記略」すなはち「レミョゾフスカヤ年代記」の著者。第三篇三〇八頁以下参照。

〔三一〕古代ウラルの中心を支配してゐたベルミ汗家とヴォルガ中流地方を支配してゐたカザン汗家との間には古來から姻戚關係が結ばれてゐたので政治的にも密接な連絡が保たれてゐた。モスクワのカザン占領（一五五二年）は自然ベルミ汗國滅亡の前提となつた。

〔三二〕前者はいづれもバリン草原南東の戰鬪的な蒙古系諸部族であつた。エルマクに滅ばされた有名な

譯者 楠 註

西伯利汗國の支配者クチュム汗はブハラ汗家の出身で、一五九八年に死ぬまでキルギス族の間に勢力を持続してゐた。キルギス・カイザク族は現在カザツク共和国およびキルギス共和国を別個に形成してをりカイザク族は約四百萬人、キルギス族は七十六萬餘人の人口を擁し、カザツク共和国の北部地方に住む約百萬人は地理的關係から西伯利住民のなかに包括されてゐる。

〔三三〕 最近の人口は二萬八千人である。ウラル南部の穀物集散地となつてゐる小都會であるが、かつては南方草原地帯から侵襲してくる遊牧民族を防禦するいはゆる「西伯利要塞線」の中心として十七世紀以來ロシアの西伯利占領確保の重要な據點であつた。

〔三四〕 この町はキルギス草原中にあり、今でも最短距離の鐵道沿線まで三百五十軒を隔てた邊境の都市で最近の人口約一萬三千人（主としてロシア人とキルギス人）である。

〔三五〕 西伯利民族の「神聖な矢」に關する習俗と傳説については譯書の第三篇三四三頁参照。

〔三六〕 オビ河畔にあり、西伯利征服の初期にはオビ河口からマンガゼイア地方を支配する根據地となり、またオビ下流のツンドラ地帯を遊牧するサモエド族との交易の中心地となつてゐた。

〔三七〕 トムスク市はトミ河の沿岸にあり、十九世紀末以降においては大學や各種の専門學校がここに集中され西伯利の文化的中心地となつてゐた。最近の人口は約十五萬人。

〔三八〕 この棚は後にクズネツク市となり帝制時代には流刑地としてドストエフスキもここに流刑されて

をり、有名な「死の家の記録」に描かれてゐる町である。最近では近くにクズ・バスの炭坑區が開發されウクライナのドン・バス以上の埋藏量をもつソ聯有数の炭源地とされてゐる。

〔三九〕 この棚は一七八二年に市制を敷き、金産地としてまた支那西域やアルタイ地方の異民族との交易地として發達し定期市が開かれ十九世紀末までに人口二萬人の都市となつてゐた。

〔四〇〕 わが仙臺漂民も西伯利毛皮獸の最上たる黒貂を親しく目撃してゐるらしく「環海異聞」の物産の項に次の記載がある。「ソーボリ、此物止白里の名産也。皮裘中の尤上好とする物なり。殊にバイカル湖の邊にて取り獲る物を至て上品とす。『漂民の時代から一世紀前にはまだウラル邊の黒貂が上物とされてゐた——譯註者』ドノス弓にて射取り、これを貢上す。取主の吏人アンガリツケ（アングラスク）といふ所に在勤す。壹四百五十丸程、皮價銀七十枚程なり、彼國通用銀にていふなり。大サ猫よりは犬にして大よりは小なり。恰も兎程あり毛細く長く、黒色にて赤ミを帯び至て柔かにしてラツコのごとく、腹の部は赤色なり。甚だ怖るべき鉤爪あり、面體猫のごとく黒色、體の長さ猫の胴のびたるがごとし。中等より以上の人々の衣服に用ゆ。足皮を縫合せる物一枚、儀平携來れり。色暗黄黒ともいふべし。大規模質の註に曰く「按に「ソーボリ」は貂鼠なり。漢土北邊諸國の産たる事諸書に見え、古來此皮を以て珍重する事に、貂不足續以狗尾等の諺に有るなり。和蘭にては是を「サーヘル」といふ。」ロシア人がこの高價な毛皮獸の追求に熱中せる狀をまのあたりに見るが如くである。西伯利における毛皮獸獵の各種の方法につい

譯者補註

に分散してゐるツングス族は一種の文化をもつてはをらぬ。より文化的な沿黒龍州地方と交渉をもつオホツク地方のツングス族は、ヴィリウイ河やアルダン河に合流する密林中の河畔に漂泊生活をしてゐる同族よりも遙かに高度の文化をもつてゐた。彼らの經濟生活は狩獵と漁撈で、或る種族のもとでは稀に馴鹿の牧畜が行はれてゐる。……ヤクーツク地方に住んでゐたツングス族は十七、八世紀の古文書のなかに典型的な野蠻人として描かれてゐる。顔に文身をした、甚だおそろしい姿の彼らはたまたま彼らと邂逅したロシア人を戦慄せしめた。併し彼ら自身が蕃族特有の臆病さをもつてをり未知の人間を恐れた。十七、八世紀の頃には彼らは毛皮税徴収のために設けられた冬營所へ姿を現はすことを嫌がり毛皮税を拂ふ必要のある場合には窓から毛皮を投げ込んで行つたり、槍の先きへ毛皮をくくりつけて窓から差したりした。彼らはまたロシア商人たちとは原始民族に特徴的な賄貿易の形式をとり、遠くから黒貂の毛皮をふりまはして見せてそこへ置き、鍋、斧、ナイフなどと交易した。さういふ状態でロシア人は十七、八世紀において彼らの生活を知ることが少なく、これに關する報道も乏しい。ただ外觀的な方面のことが書かれてゐるにとどまる。〔「ヤクーツキヤ」一九二七年刊原版二八三頁以下「ヤクーツキヤの歴史の運命」〕

「マク氏はやや文化程度の高いとされるアムール沿岸のツングス族に關して次のやうな記載がある。『ロシア人は東部西伯利のツングス族の大部分をツングスと呼び、ただザバイカル地方の或る種族だけをオロチョンといひ、特に支那領「マク氏のアムール旅行は一八五一年で愛理條約よりも數年前である」

を放浪し、そしてロシアに毛皮税を貢納してゐる少數のツングスをさう呼んでゐる。三百年前にはこれらの森林の住民はこの地方を支配してゐたラフカイ侯とその兄弟に臣従してゐた。これら諸侯のゴロド〔城市〕は紙の窓をもち木柵をもつてめぐらされた小さな家々をもつて形成されてゐた。——一六五〇年にさうした小城市をたたく目撃したハバロフはさう書いてゐる。ハバロフはラフカイ侯とその兄弟が住んでゐた城市ばかりでなく、それ以外の右のやうな多數の城市のことを描いてゐる。これらの小城市はアムール河に沿つて一部は現時のアルベジンから上流に、一部はその下流に點在してゐたのであり、いまのアルベジンもさうした城市の一つがあつた所である。現在この地方に住んでゐるオロチョン族やマネグル族は、本質において、おそらくロシア人によつて荒廢せしめられてしまつたといふのはハバロフ以後においてはどこにもそのことが記載されてゐるから、諸城市の住民の後裔なのであらう。〔「アムール紀行」一八五五年刊 原版四六頁〕アムール地方のツングス族、オロチョン族等についてはシロコゴロフの前掲書のほか鳥居龍藏博士「人類學及び人類學上より見たる北東亞細亞」中に詳しい記載がある。

〔四五〕 いまのブリヤット蒙古自治共和國を形成してゐる北方蒙古族に屬するこの民族は、最近の總人口二十三萬七千人である。そのうちバイカル湖の西南部イルクーツク地方に住む者は生活習慣とも早くからロシア化し、定住して農耕をいとむ者が多く、バイカル以東および北部の者は一部の農耕者のをのぞき主として牧畜により生活してゐる。現在の彼らは溫順平和の性質をもつて聞えてゐるが、嘗つては勇敢な蒙古遊

二四
牧民族中の大族としてロシア人の侵入にたいしてヤクト族やチュクチ族とおなじく果敢な闘争をつづけた。地理的關係その他の事情によりチュクチ族（補註「五〇」参照）が長期間の抗争をつづけたのに比べてブリャト族は比較的短期間に征服されてゐる。ロシア人のブリャト民族征服の歴史に關する詳細は西伯利古文書の最初の整理編纂を完成したミルレルによつて其著「西伯利國誌」（譯書第三篇參照）のうちに綴られてをり、またそれを基礎としてフィシエルの「西伯利史」の中でかなり詳細に記述してゐる。マツク氏も「アムール紀行」の中でブリャト族征服の歴史を記述する際にフィシエルに據つてゐる。ブリャト民族に關する正確な資料源泉とされてゐるフィシエルの記述を以てここに補ふこととする。

「ロシア人は十七世紀初にブリャトに關する最初の報道をえた。その時すでにエニセイスクでこの民族の征服のことが考慮されはじめた。ワシリイ・アレクセエフのツングスカ河上流への遠征が不成功に終つたのも一六二七年にマクシム・ペルフィリヨフはアンガラ河のシマンスキイの瀬（イリマ河口の上流八十露里）に達し、そこから陸路をとつてツングス族と隣接して住むブリャト族を侵掠した。……一六二八年ビョートル・ベケトフはさらにアンガラ河を遡航しオカ河畔のブリャト族から初めて貢納を取り立てた。（フィシエル「西伯利史」三四二―三四四頁）その後ブリャト族は騷起したが、ブリャト族がどこから銀を手に入れたのか調査する命令をうけて一六二八年にトボリスクから派遣されたヤコフ・フィリプノフの遠征隊のため一六二九年にオカ河の河口ちかくで殲滅的打撃をうけた。ブリャト族に殲滅的打撃をあたへた

のちフィリプノフが死ぬと、間もなくロシア人は宣撫懷柔政策をもつてブリャト族を手なづけようと考へて捕虜を返還したが、捕虜を護送していつたカザック達は殺されてしまつた。そこでマクシム・ペルフィリヨフは再びエニセイスクから二門の大砲を携へてオカ河の河口に柵を建設するため進撃し、エニセイスクからの援兵をうけて一六三一年ようやくその任務を完遂することができた。このペルフィリヨフが設けた柵は、ブリャト族の族名をとつてプラトスキイの柵と命名された。かうした防備を設けたにもかかはらず、ブリャト族は自分たちの分はもとより、前からブリャト族に臣従してゐたツングス族の分も、黒貂毛皮税をロシア人に貢納することを斷乎として拒絶した。そして一六三五年にカザック隊長ドナエフ以下五十二人の守備隊を襲殺し、この年にエニセイスクから派遣されたニコライ・ラドコフスキイの軍隊に征服された。一六三七年にワシリイ・チュルヌメンはプラトスキイ柵を出發しアンガラ河を遡航してその地方のブリャト族から貢納を取り立てたが、翌年になるとこの新附の民は貢納を拒否した。一六三九年になつてイリマ・ペルロフは平和的宣撫策に成功してようやく貢納を拂はせることができた。爾來、この地方のロシアの領土はプラトスキイ柵を中心にして逐次擴大され、アンガラ河に沿つてヴィボロフ河からウダ河口にいたるおよそ四百露里の間が征服されるにいたつた。（同上三四七―三五二頁）

「クラスノヤルスクでもブリャト族の征服計畫がたてられ、軍務知事ドゥパンスキイは一六二九年にカン地方へカザック隊を送つたが、彼らはブリャト領までは達しなかつた。（二八八頁）

譯者 補註

二五

「一六四〇年にカンスク塔市が建設され、一六四五年に軍長ビョトル・プロクシエフはブリャト征服のカザック隊を派遣したが失敗した。この方面では平和工作の方が却つて成功し、ブリャトの土侯を懐柔して貢納を約束させたのみか、一六四七年には土侯らからその領内にロシアの柵を設けるやうに提議してきた。そして一六四八年にウチンスキイの柵（現時のニジニ・ウチンスク）を設けたが、翌一六四九年に毛皮税の徴収にかけたカザックを殺してしまつた。一六五二年になつてブナコフ遠征隊の手でふたたび征服が行はれた。ロシア人はまたエニセイスクから別にレナ河上流へ向つて侵入し、隊長ガルキンは一六二九年にアンガラ地方にイリムスクを、一六三一年にウスチ・クトスクを建設した。まもなくガルキンと交替した有名なベクトフのカザック隊はウスチ・クトスクから更にレナ河を上流へ廻航、當時ブリャト族居住地の北境をなしてゐたクレンガ河の河口に侵入した。しかしベクトフ遠征隊はあまり草原ふかく侵入したため反撃にあつて敗北し退却を余儀なくされた。（同上二五六頁）

「その後レナ河上流地方のブリャト族をして貢納せしめようとする企てが數回おこなはれたが、いづれも失敗におはつた。一六四一年ヤクーツクの命令でワシリイ・ヴィチャゼフがブリャト遠征に派遣され、最初はブリャトは貢納を拒んで頑強に戦つた。しかし遠征隊がアムガ河まで侵入した際この地方のブリャト族は降伏した。このとき勇敢なブリャト族の土侯の一人チェンチュガイは、ロシア人の手に捕虜となるのを潔よしとせず、自ら火中に投じて焚死した。（同上二五九頁）

二六

「おなじ一六四一年にマルティン・ワシリエフは、クレンガ河口から四露里の下流に、ウエルホレンスク柵を築いた。この柵は一六四七年にレナ、アンガラ兩河の沿岸地方のブリャト族が力を集結して攻撃してきたため、止むなく稍や上流のクレンガ河口へ移されることとなつた。その少し前、一六四五年に小貴族アレクセイ・ペダレフは一隊を率ひてウエルホレンスクの柵からアンガラ河を越えて西岸へ侵入したが反撃に逢つて非常な損害をうけた。ブリャト族はこれらの勝利に勇気をえて一六四九年再びウエルホレンスク柵を包圍した。守備隊長ワシリイ・ネフェヂェフは間もなくブリャト族の包圍を破り、アンガラの對岸に進出して、ブリャト族に殲滅的な打撃を加へて縦横に劫掠した。それ以來、ロシア人はこの地方の支配を強化したが、この地方に住むブリャト族の多くはロシア人の支配に服することを欲せず、一六五五年になつて大舉計画的にこの地方を引拂ひザバイカル地方の蒙古人の方へ移動していつた。（同上二五三頁）

「アンガラ河畔のブリャト族は、ロシア人との戦鬪に敗れてもロシアの支配下に立つことを肯んじなかつた。一六四八年にオカ河の對岸にあつたブラトスキイ柵が前の場所からアンガラ河の右岸へ移されると、オカ河畔地方に住んでゐたブリャト族は全部こそつて東方へ移動し去つてしまつた。そのため一六五一年にベルフィリョフが順撫工作を講じて逃亡者の一部を前住地へ呼び還すまでは誰からも毛皮税を徴することのできぬ状態であつた。（同上二五七頁）

二七

譯者補註

二八
アト族に貢納を約束させた。しかし新設バラガンスキイ柵の軍長イワン・ボハボフがブリャト族に苛酷な
壓迫を加へたため、彼らは草場を棄てて他の蒙古人の方へ去つてしまつたので貢納は皆無となつた。一六
四三年クルバト・イワノフはバイカル湖のオルホン島に住むブリャト族を征服した。さらに一六四四年ワ
シリイ・コレニコフは後にバラガンスキイ柵の建てられた場所の南方へ一柵を設けたが、ウエルホレン
スキの軍長が、アンガラ河とレナ河の間に介在する全地域を、コレニコフの属するエニセイスク政廳の
支配下におくことに反對したためこの柵は撤去された。コレニコフは翌一六四五年バイカル湖を渡つて
南岸に達したが上陸せず北岸へ引返し、ツングス族と戦闘の後ウエルホ・アンガルスキイ柵を建てた。彼
はここでバルグジンとセレンガの間を支配するブリャト蒙古侯トルカイ・タブンが多量の銀をもつてゐる
ことを聞き込み、この情報をもたして一六四七年にエニセイスクへ引返した。それに先だち一六四六年
エニセイスクからイワン・ボハボフの一隊がバイカルへ派遣された。彼は途中イルクタ河畔のブリャト族
から貢納を取り上げつつバイカル湖南岸に上陸し、數名のブリャト人を捕虜とし、トルカイ侯と交渉をと
り者を求めトルカイ侯の平和使節といふ名目でウルガ(庫倫)にいまのウラン・バトウル」の車臣汗の
ところへでかけて行き、汗を説いて一六四八年にモスクワへ蒙古から最初の使節を派遣させることに成功
した。併しこの使節は一六五〇年ロシア人に護送されて歸途バイカル湖の南岸で殺された。エニセイスク

長官は、長いあひだボハボフの消息がなかつたので援兵を率ひさせてガルキンを送り、ガルキンは一六四
八年バルグジン柵を設けた。その後この柵は長期にわたるバイカル南東地方の征服を目的とする遠征隊の
根據地となつた。ガルキンはバルグジンからエラヴィン湖までの地域で貢納を取り立てた。蒙古から歸つ
たボハボフはその後一六六一年になつてイルクツクの砦を建て、それがイルクツク市の基礎となつ
た。この砦市を根據地にしてバイカル湖對岸地方のブリャト族の征服が完遂された。一六六二年ピョートル・
ペクトフはエニセイスクを出發してレナ、セレンガ兩河の上流にあるイルゲン湖畔へ侵入の命をうけた。
彼はプラトスキイ柵からアンガラ河を遡航し、反抗するブリャト族を撃破しつつバイカル湖に達し湖水を
渡つて南岸に上陸し、越冬のち翌春セレンガ河を航行してヒロク河の河口にいたり同河を辿つてイルゲ
ン湖に達した。その途中でバルグジンからイルゲン湖へのばつてきたマクシモフの遠征隊と邂逅した。ピ
クトフの手でイルゲン湖畔の柵は設けられ湖畔地方のブリャト族から貢納を徴収した。(同上五四五頁)
かくロシア人によつて征服されたブリャト民族の居住地方は事實上の占領征服が完遂されたのち、一六
八九年および一七二七年の露支條約によつて正式にロシア帝國の領有に歸することとなつたのであるが、
その征服過程に現はれたところによつて判斷すると、ブリャト民族はロシア人と最初にぶつかつた時代に
おいてはその後の彼らの居住地方よりもずっと北西に據がつてゐたことが判る。彼らはロシア人と抗爭を
つづけながら遂に同族が多數密集してゐる南東へ移動し、其後それらの同族とともにロシア人のために

完全に征服されてしまったのである。ロシア人に征服された後には彼らは今度は北東に向つて、以前ツングス族の民住してゐた地方へ進出しはじめてゐる。

〔四六〕ハカス蒙古人（人種學上ではアベカン・チュルク族とよばれてゐる）一九三〇年以來オイルト自治州の南東、トヴァ共和国の北西に隣接してハカス自治州を形成してをり、人口四萬五千人である。

〔四七〕最初イルクト河の三角洲に設けられたこの棚はその後水害のため荒廢してアンガラ河の右側に移されブリャト遊牧民の襲撃を防禦する櫓、柵、内外壁、鹿寨等をもつてめぐらされた堅固な都市がそこに築かれた。そして一六八六年にイルクーツク市と稱され、約一世紀のちネルチンスク、オホツク、ザバイカルの諸地方を管轄する地方代官の所在地となり、さらに一八〇三年には全西伯利を統轄する總督府の所在地となつた。あだかも文化年間に露使レザノフが長崎に渡來した後、フォストフ等の千島、樺太への侵寇、ゴロウマンの函館幽囚などが國と密接な關係のある諸事件が起つた時代にはイルクーツクが西伯利統治の中心となつてをり、ゴロウマン釋放の條件として幕府にもたらされたロシア人樺太侵寇に對する聲明書は在イルクーツクの西伯利總督によつて署名されてゐる。レザノフに送還されたわが仙臺漂流民が滞在した時代のイルクーツク市は「當所に家數三千軒程あり、奉行在勤にて三人ありと聞ゆ。本國より三四口は約十餘萬人である。」（環海異聞）といふ状態であつた。最近イルクーツク市の人口は約十餘萬人である。

〔四八〕ヤクーツキイの柵は現時のヤクト自治共和國を形成するヤクト族（サハ族）征服の據點となつたばかりでなくツングス族やブリャト族の征服、またロシア人の太平洋進出の基地となつた點で西伯利征服史上もつとも重要な役目をはたした。ヤクト共和國の主府となつてゐるヤクーツクの人口は共和國内の他の五都市と併せ一萬五千人にすぎぬ（一九三〇年）。わが仙臺漂流民がこゝを旅行した時代（文化年間）には「此處の家數凡二千軒程も相見え其家作の體は木造りも石造りも御座候」（環海異聞）とあつて最近に比し反つて繁榮してゐると思はれる。十九世紀初頭までのヤクーツク市はまた西伯利各地から送られてくる異民族の奴隸をロシア人が賣買する中心地となつてゐた。ヤクト族最近の總人口は二十四萬人（一九二六年調査）である。この民族は他の西伯利原住諸民族にくらべて文化程度もやや高く、ロシア人の侵入以來、かなり激しい抗争をつづけてゐる。ヤクト族反亂の歴史としては一六三四年のムイマクを指導者とする反亂、一六三六年のハラガラス部族の酋長ニミギによつて指導された反亂、十七世紀七〇年代におけるバルトツギ・ティミレエフの率ひる長期にわたる反亂、一六八一年のチェンニクの反亂等があり、かくして十八世紀初までに完全に征服されたが、一世紀にわたる屢次の抗争中に多くの人口が削減された。パフルーシン教授は論文「ヤクーツキアの歴史的運命」のなかで次ぎのやうに述べてゐる。〔右の論文がてうと本書の出版と前後してアカデミアの論文集中に發表された關係からであらう、著者はヤクト地方の征服については本書のなかでほとんど觸れてゐる。〕

譯者 補註

三三
「蒙古人のために中央アジアの遊牧地からレナ流域の方向へ追はれてきたチュルク系のヤクト族はツングス族の居住地方へ楔形に割り込んできたのである。それは十三、四世紀のこととされてゐる。『譯者』ミルレルは、ツングス族の間に、この侵入者を防禦するため勇敢に抗戦したがとうとう敗北してしまつた」といふ傳説がのこつてゐることを記してゐる。ロシア人がヤクト地方を占領した當時、ヤクト族の大部分はアルダン河とその支流、アムガ河、レナ河、オレクマ河によつて形成される方形地帯に住んでゐり、後にヤクトツクの發生した地域には彼らのうちの有力な部族カンガラス族が住んでゐる。ロシア人がレナ河畔に根據地を固めるまでには彼らとはげしい闘争をせねばならなかつた。『カンガラスの領土はアルダン河に達してゐた。その後この部族とわかれた別の部族がウィリウイ河畔へ移動し、カンガラスの酋長サハイ・スイナクも「悲運」に追はれて四〇年代にそこへ移つていつた。アルダン河の上流ではヤクト族はマヤ河の河口地方に住み、その支流クツタ河、アムガ河を奪取した。オレクマ河畔やその支流にもヤクト族は住んでゐたが、十七世紀時代にはオレクマ河から上流のレナ河沿岸にはバトマ河にもウィチマ河にもヤクト族はゐらなかつた。十八世紀から十九世紀にいたるまでそこへはツングス族がヤクト族の侵入を許さなかつたのである。レナ河の下流ではロシア人の侵入する前にヤクト族はウィリウイ河の近くを占有し、十七世紀の二〇年代にシアホフを隊長とするロシア人カザツクはそこでヤクト族を發見してゐる。十七世紀末にはレナ

河口から西のオレク河流域までヤクト部落が擴がつていつてゐたが、この世紀中にはまだトゥルハンスク地方にはヤクト族はゐらず、彼らはその後になつて移動していつたのである。レナ河から東ではヤクト族は十七世紀中にヤナ河及びインヂギルカ河の上流に達し、そこでラムウト族と闘つてゐた。十八世紀の前半にはヤナ河のほかインヂギルカ、アラゼア、コルイマ等の諸河の流域まで入りこんでゐた。『ヤクト族は十七、十八世紀においてその文化の比較的高度な點で他の西伯利原住民とちがつてゐり、その文化は彼らのすべての物質生活、住居や衣服等にもあらはれてゐた。』（論文集「ヤクト・タイア」聯邦アカデミア、一九二七年、原版二八六頁以下）

〔四九〕 まだビョートル大帝により新式造船術がロシアへ輸入される前、ロシア人が十六、七世紀時代に北氷洋上をのり廻り、そして遂に太平洋へまで持ち込んだこのコチャ船とはいかなる船舶であつたらう。『西伯利でコチャと稱せられてゐる船は機漕と帆走によつて海洋の航行に適するやうにした、甚だ初步的な構造の船舶である。』（ダアリ、第一卷）『古代ロシアのコチャ船の建造にはなんら複雑な技術的方法も専門的知識も加へられてゐない。一層甲板の長さ十二尋ほどの平底船で一本の通し木材で造られ木釘をもつて固め、櫓でも帆でも航走するが追手をうけて進むことができるだけで間切ることとも側風を利用することもできぬ。』（ザゴスキン）『ビョートル以前のロシアにおける水路と造船事業』（一九一〇年）また『西伯利史』の著者フィセルはヨーロッパ人には想像もできぬほど簡単な船でしばしば遭難しながら長いあひだ氷海を航海しつ

譯者補註

づけてゐたロシア人の勇氣と無頓着とを指摘し「西伯利のコチア船の故郷は白海の沿岸地方であつて、その後これが西伯利へ持ちこまれた」と述べてゐる。公文書に遺つてゐるコチア船の建造方法や積載量等については譯書一四二頁以下、二二六頁以下等を参照。

〔五〇〕ロシア人は古くは「チュフチ」とよび現在では「チュクチ」と呼んでゐる。この民族は現時のチュコト民族區すなはちベーリング海岸からインヂギルカ河、北氷洋岸からアナドール河にいたる廣大な地域に住んでゐるが、最近の總人口は僅か一萬二千五百人にすぎぬ。ロシア人侵入の當時には相當多數の人口を擁し、隣接地方のコリアク族を征服して貢納をおさめさせてをり、對岸のアメリカ大陸（アラスカ）のエスキモー族とも交渉をもつてゐた。チュクチ族に征服されてゐたコリアク族は最初たちまち彼らから離れてロシア人に歸順し、其後ロシア人の壓迫を怒つて反亂したのであるが、民族の自負心のつよいチュクチ族は終始一貫して勇猛果敢な抗争をつづけた。ロシア人はしばしば組織的なチュクチ討伐を行つてゐるが、完全にこれを平定するのに全一世紀以上を費やしてゐる。その期間には武力による剿滅政策と懷柔政策が相交錯して採用された。有名なカザツク隊長シェスタコフやバウルツキイは一七三〇年代にベーリングの第二回探検計畫と前後して「大きな陸地」、アメリカ大陸への通路を開くためチュクチ討伐にでかけて戦死した。ロシア人がチュクチ族の征服に長期間を要した原因としては次ぎの諸點があげられてゐる。

（一）この民族の性質が非常に驕悍で獨立心が強く最後まで決して服屬を肯んじなかつたこと。（二）西伯利

異民族征服におけるロシア人の興味の直接對象物であつた毛皮の狩獵を専らとせず馴鹿の牧畜を生活としてゐたこの民族は、毛皮を追求するロシア人の征服の熱意を刺激すること比較的すくなかつたこと。（三）僻遠廣大なチュクチ遊牧地への侵入が困難であつたこと。しかしカムチャツカの完全占領とアメリカ大陸への進出がロシア政府の當面の問題となるとともにその途上にあるチュクチ族の平定が必要とされ討伐が強化された。シェスタコフおよびバウルツキイ等のカザツク隊の組織的なチュクチ領侵入がベーリング探検計畫と呼應して行はれたのはそのためである。チュクチ族の人類學的研究については鳥居龍藏博士「極東民族」第一卷一六九頁以下に詳細な記載がある。

〔五一〕十八世紀末と十九世紀初にわが伊勢の漁民や仙臺漁民がアレウト列島へ漂着した時代に「牙の人」エスキモー族の奇習はまだ残つてゐて、彼らはそれを目撃してゐる。アメリカ邊のものは耳又は鼻へ金を通し、或は下唇へ穴をあけ、鳥の羽を以て牙の様に唇の下へ出申候。此度被召候アメリカ之もの、魯西亞國之風俗に相成居候得とも、唇之下に穴をば只今も明たるままにて有之候。（「漂流奇談全集」二七九頁「神島丸漂着始末」）彼地の女は腮に二本、鼻の穴に二本角有て、面體並に手の甲に青き筋を入墨仕候。其角は自然に生候物にては無之、鯨の骨にて筆の太さに削り、長さ二三寸懸はづしに相成候様に拵候ものに御座候。（同上）併し異様なるは口の廻りへ入墨致し、又鼻の障子骨の前部に穴を穿つ事牛鼻のごとくし、其穴へ横に小き棒を通し、小鼻を張るやうにし、擬其横たへ候小棒に魚骨にて細工したる連環を下げ上唇の

譯者補註

三五

上際迄下し候。又硝子の小玉をもさげ候。是はオロシヤ船通用の後の事と聞へ申候。〔環海新聞〕
シア人侵入後における異民族ロシア化の狀態がこれらの漂流民の報道によつて窺はれる。

〔五二〕 ベーリング海峡のことは、デジュネフがアジア大陸の北東端いまのデジュネフ岬を廻航して太平洋に出てから八十年を経て、ベーリングの探検によりはじめて明かにされたのであるが、カムチャトカに關する各種の報道は當時デジュネフの同行者によつてヤクーツクへ齎されてゐる。しかしロシア人が本格的にカムチャトカ征服に着手したのはデジュネフの漂流から約半世紀以上の後である。(補註五三)参照)デジュネフの航海報告は長い間ロシア人の注意をひかずヤクーツク政廳の保存文書のなかに埋もれてゐたのを一七三六年になつて學士會員ミルネルが発見した。デジュネフのことは當時シベリアに捕虜となつてゐたスエデンの士官ストラレンベルグも夙に聞き知つてゐたものらしく、彼の編纂した地圖のコレイマ岬のところに、――ロシア人の一隊が多量の困難と生命の危険を冒してここからカムチャトカの地へ行つた――と記載されてゐる。

〔五三〕 このアトラソフはカムチャトカ征服者としてばかりでなく文獻に載つてゐる最初の日本人漂流民をビョートル大帝のところへつれて行き、ビョートル一世の千島侵略および日本探検計畫に動機をあつた興味ある歴史的人物である。ヤクーツクのカザツク隊長であつた彼は一六九六年に部下モロゾコのカザツク隊を派遣してタイギル河畔のカムチャダールの橋を擧げたのち、翌一六九七年より六十年のカ

ザツクと六十人の歸順ユカギル族を率ひてカムチャトカ半島の西岸まで侵入し、多量の毛皮税を取立ててヤクーツクへ引きあげた。この時彼はカムチャダールのところに助けられてゐた日本人漂流民傳兵衛といふ者を發見してヤクーツクへ伴れてゆき、一七〇一年にビョートル大帝の命により傳兵衛を同伴してモスクワへ赴いた。傳兵衛は一七〇二年一月八日にモスクワでビョートル大帝に謁し日本の事情を陳べた。一七〇三年ベテルブルグが建設されてから大帝の命令で特設された日本語學校の教師となり歸化洗禮をうけてガブリエルと改名し一七一〇年に死んだ。アトラソフはカムチャトカに黒貂毛皮の豊富なこと、カムチャトカ征服を完成するには土人威嚇のため二門の大砲が必要なこと等を説き、ふたたびカムチャトカ征服の途についたが途中ツングスカ河畔で商人ドブリニンの商品を掠奪した罪で投獄され、一七〇七年にカムチャダールの反亂が起つたため贖罪のためその鎮壓を命ぜられこれを平定した。西伯利征服の初期には犯罪者に未開地方の探検や毛皮税の徴収に赴いて贖罪させるといふ方法がしばしば採用されてゐた。一七一一年に彼れが着服して貯へこんでゐた多量の毛皮を掠奪する目的で反亂を起した部下のカザツクのために惨殺された。(カザツクの反亂事件については補註五六)参照

カムチャトカ半島の原住民カムチャダール族は侵入してきたロシア人に反抗して剿滅されたほか、その後この半島が太平洋におけるロシア人の活動基地となり毛皮税を徴収される以外にいろいろな奉仕的賦役を課せられたこと、ロシア商人の詐術的搾取によつて急激に零落と飢餓に陥り、その上ロシア人が持

譯者 補註

三七

三六
ちこんできた天然痘や悪疫傳播のために多数死滅していった。ロシア人の侵入當時この民族の人口がどれほどあつたか不明であるが、アトランソフの報告によると「カムチャダール族はエロフカ河から海洋までの間に百六十個所の棚を有し……一つの棚内に一部落もしくは二部落をなして二百人から百五十人づつ住んでゐる」オクウニの前掲書による。とあるからこの計算だけでも三萬人近い人口があつたとせねばならぬ。ベルグ教授の推定によると十七世紀末におけるカムチャダールの人口は凡そ二萬五千人であつた。(ベルグ著「カムチャトカの發見とペーリングのカムチャトカ探検」原版二〇頁)最近のカムチャダール族の總人口は僅に四千二百十七人(一九二六年人口調査)である。オクウニは前掲「カムチャトカ植民政策史」の中でカムチャダール反亂の歴史とともにペーリングその他幾多の探検隊がカムチャトカを根據地として活動した際に、その上カザツクや役人の掠奪に逢ひ奴隷にされ餓死者が續出し、これに反抗して騷擾することゝ多數の民族剿滅が行はれた幾多の事例をあげてゐる。十八世紀末から十九世紀初にかけカムチャダールがロシア商人のために滅ぼされていつた事實についてはクルッセンシュテルンも詳細に指摘してゐる。(クルッセンシュテルン「日本紀行」羽仁五郎譯、第二卷)またゴロウニンは千島測量中にわが國に捕はれる前年、一八〇一年カムチャトカ滞在中に書いた報告中にもカムチャダールの滅亡してゆく状態が詳しく述べてある。「カムチャダールは毎年數個月づつ飢饉に襲はれてゐる……彼らはその時白樺の甘皮を犬の飼料として蓄

へてある少量の乾魚の粉にまぜて喰つてゐる」(「東海岸ロシア移民史資料集」第二卷一八六一年刊「カムチャトカにおける二回の越冬」)ゴロウニンはまたロシア商人スモレンニコフがカムチャダールを搾取する典型的な方法について述べてゐる。「彼はカムチャダールの弱味につけ込んで黒貂その他の高價な毛皮と交易して法外な値段で火酒を賣りつけてゐる。それがカムチャダールを窮乏に陥れるのである。そして彼らが自分や犬のために食料の不足を訴へるときには苛酷な條件でそれを貸しあたへる。彼らに貸した品物の代價のかはりに夏になると一定の時間を働かせ、それでまた十倍の儲けをする。かくして彼(スモレンニコフ)は自分の家畜のために必要な干草や多量の乾魚を貯へることができ、土人が飢饉を訴へるのを待つてそれをまた同じ條件で貸しつける」(同上)

〔五四〕(一)に著者が引用してゐるのは、ロシア人が初めて日本の踏査を企てた次ぎの事實を指すのであらう。一七二三年(これはペーリングの第一回探検に先だつこと十餘年、ピョートル大帝が最初の日本漂流民傳兵衛を謁見してから十二年の後で、まだ大帝の在世中のことである)ヤクーツクの軍務知事はカムチャトカの反亂カザツク隊長ゴズイリョフスキーにたいして贈罪のため千島および日本の探検踏査を命じた。それによると、まづ「カムチャトカの鼻(ロバトカ岬)を踏査した上それに接続してゐる島々(千島列島)および日本を探査し「その國(日本)へ行くにはいかなる交通路をとることが可能であるか、また彼地においては如何なる武器を有するか、その住民は支那人のごとくロシア人と和親通商をなすことが可

譯者補註

能であるか否か、西伯利の産物中なにが彼らに有用なものであるか」等を調べることであつた。「オクツ」の上掲書「カザック隊の反亂事件およびコズイリョフスキイの千島探検については補註「六二」参照。

【五五】補註「四五」参照。

【五六】「ボクルチニク」とは資本家との間に獵獲物の歩合による分配契約のもとに西伯利の毛皮獸獵に従事するロシア人獵師のこと。ヘルマクの遠征の場合にもハバロフの遠征の場合にもカザックたちは資金の提供者との間にこの歩合契約を締結してゐた。

【五七】十七世紀における露支衝突の歴史的な遺跡であるアルバジンの柵についてはマツク氏の「アムール紀行」中に詳細な記述がある。アルバジンの柵は一六八九年ネルチンスク條約とともに支那側に引渡され、そのとき支那人の手で徹底的に破壊されてしまつたのであるが、マツク氏が踏査した當時（一八五二年）にはその遺跡は滿洲人には「ルクス」、マネグル族には「オロー」といふ地名で知られてをり、その地にはまだ方形の粘土の城壁が残つてゐた。またその正面に相對して設けられてゐた支那包圍軍の陣地の跡もそのまま残つてゐた。

【五八】このカザック共和國はその後ザバイカル・カザック兵村を形成するにいたつた。ロシア語の「カザック」といふ語源は「おそろく中央アジアの放浪する者」「流亡する者」を意味する「カズマク」から出たのであらう。ビダリ「バルトリド氏は「チュルコ語のカザック」といふのは（その語源は今日もなほはつきりしてゐない）自己の國家、部族又は氏族から分離して、冒險者の生活をせざるを得なくなつた者を指すものであつた。……モスクワ王朝のルシの政治と妥協することを欲せず、本國を棄てたロシアの「脱走民」もこのチュルコ語のカザックを自稱した」（『東洋研究史』四二六頁）しかしその後カザックはロシア帝國領の邊境を守護する一種の屯田兵としてカザック兵村を形成してゐたことは周知のとほりである。

【五九】この時の支那（清國）側の全權代表は索額圖であつた。

【六〇】ゴロヴィンとの交渉に際して支那の全權索額圖を補佐したのは一六八八年に五人の宣教師とともに支那へ渡來して康熙帝の信任を受けてゐたジェルビオンとペレイラの二人である。

【六一】ニコラウス・コルネリオン・ヴィトゼン（一六四一年—一七一七年）は阿姆斯特ダムの名門に生れビョートル一世とも親交があつた。一六六四年にロシアを訪づれ數年間滞在してロシアに關する豊富な資料を蒐集し一六八七年に「アジア及びヨーロッパ北東部の新地圖」、一六九二年に「北東タルタイ」を出版した。これらの著書は今日でも古典として生命を保つてゐる。レミョノフについては補註「三〇」ヘルベルシュタインについては「一五」参照。

【六二】カザック守備隊の反亂事件はロシア民族の西伯利征服史における特徴的な事件である。カムチアトカの征服者アトラソフ（補註「五三」参照）が一七〇七年に監獄から釋放されて贖罪のため再度カムチアトカ討伐に派遣された同じ年に小貴族チリコフ、次いで五十人長オシプ・リイビン（一七〇九年）などが毛

譯者 補註

皮貨税人としてカムチャトカへ到着した。彼らは國庫のためよりも自分のために原住民から苛酷に毛皮税を取り立てて私腹を肥やし勢力争ひをはじめた。一七二一年にカザツク守備隊が反亂しアトラソフ、チリコフ、リイビンの三人を殺し彼らの財産全部を掠奪した。反亂カザツク七十五人は平均黒貂六十枚、狐二十枚、ラッコ二枚づつ分配した上仲間のなかからグニロ・アンツィエロフをアタマン(頭目)に、イワン・コズィリョフスキイをエサウル(副頭目)に選んで半島を荒らし廻つた。この報に接したヤクーツク政廳では反亂カザツクの鎮撫策として彼らに彈藥を補給し贖罪のため千島列島の征服と日本の踏査(補註「五四」参照)を命じた。隊長アンツィエロフはアワチア灣で原住民と戦闘中に戦死したがコズィリョフスキイは一七一三年五十人の部下と十二人の土人およびその前年カムチャトカに漂着した漁船乗組の四人を日本人を案内者としてその夏に千島の第三島まで踏査して引返した。コズィリョフスキイはこのとき踏査した島々のほか漂流日本人や千島人の談話にもとづいて松前や日本の北部一帯を含む千島列島の地圖を作製し、日本製の絹織物や鐵器などを添えて政府に報告書を提出してゐる。コズィリョフスキイ自身はその後原住民から掠奪した黒貂毛皮千二百六十枚を修道院に寄進して修道僧となつたが、一七二七年に大主教廳から「脱走修道僧コズィリョフスキイの搜索及び逮捕」の命令が出てゐるところを見ると彼は再びなにか冒險活動を企てたのであらう。(オクウニ著前掲書「ベリリング探検隊文書集」「シビルスカヤ・ピラリョグチエア」等による)

四二

〔六三〕 ポリシヤ・ゼムリア(大きな陸地)とはロシア人がチュクチ族の言葉をロシア語に直譯した呼び方であつてアメリカ大陸のことである。一七二六年頃、ベリリングがすでに第一回探検の途にのぼりオホツクへ向ふ途中に在るとき(ベリリングはこの探検の發案計畫者たるピョートル大帝の歿後露曆一七二五年二月六日にペテルブルグを出發した)ヤクーツクのカザツク隊長アフナシイ・シエスタコフ(補註「五〇」参照)がベテルブルグへ到着し、チュクチ族からロシア人がきき傳へた「ポリシヤ・ゼムリア」のことを報告した上、地圖まで示した。それに依ると、この「大きな陸地」はコルイマ河の河口附近の對岸にあるといふので、政府はまづコルイマ河の河口に達する陸上交通路を確保するため「まつろはざるチュクチ族の鎮定」を決しシエスタコフを隊長にバウルツキイを副隊長に任命し軍事遠征隊を派遣した。(補註「五〇」参照)またこれと緊密な關係をもつ、ベリリング探検隊とは別個のイワン・フォドロフおよびミハイル・グヴォズデフを指揮者とした探検隊が新陸地や島嶼の發見を目的として派遣された。彼らはベリリング第一回探検の際に北氷洋を航海した經驗のあるモシニコを案内者とし、原住民が「天氣のいい日にはここから大きな陸地がみえる」と語つたもつとも狭い所で海峡を渡り、一七三二年八月二十一日頃に「プリンス・ウエルス卿」へついた。ロシア人がアメリカ大陸に達した最初である。彼らは數日間海岸を遊弋しその住民に關する若干の資料をあつめ九月二十八日カムチャトカ河の河口へ歸つてきた。フォドロフおよびグヴォズデフが所屬隊長バウルツキイとオホツク港務所へ提出したアメリカ大陸發見に關する報告書は今日傳はつて

譯者補註

四三

をらずその後グヴォズデフがベーリング探検隊に編入されてから彼れの上官となつたシュバンベルグ（元
文年間に日本海岸へ現はれた黒船の指揮者）が作製したグヴォズデフのアメリカ探検供述書の前半が保存
されてゐるだけである。（主として「ベーリング探検隊文書集」序文による）

〔六四〕「グリゴリー・シェレホフ（一七四七年—一七九七年）がアレウト列島から逐次にラッコを追つてコ
ヂック島に到達し、ロシアの毛皮狩獵基地を設けてアラスカ一帯がロシア領土として宣言されたのは、ベ
ーリングのアラスカ探検（一七四一年）から四十一年の後である。イルクーツクに本店をおく「合同アメ
リカ會社」（資本金七十二萬圓）がバヴォル一世帝により勅許されたのは一七九七年九月で、これを擴張改
組し露都の貴族を株主に加へ本店をベテルブルグにおく「露米會社」（資本金百七十二萬四千圓）の創立勅
許狀が與へられたのは一八〇〇年十月である。露米會社は東インド會社にならつて組織されたもので、勅
許の日から向ふ二十箇年間そのころ實際にはロシア帝國の行政權力を及ぼしたが北緯五五度以南のアメ
リカ海岸で植民地を建設し軍事行政上の支配權とともに一切の狩獵貿易の特權を與へられた。この會社が
ペラノフをアメリカ總支配人（一八一八年まで）としてアメリカ北西岸で活潑な植民活動をしたのは十九
世紀初頭から三十年代までである。海岸地方の原住民を征服して悉く會社に隷屬させ、これを使役して毛
皮獵産業に従事し、奥地の原住民と交易してゐた。會社の原住民にたいする苛酷な取扱は當時この地方を
航海したロシア航海家がこれを指摘し（リシアンスキイ、ダヴィドフ等の航海記。ダヴィドフでは原稿第二巻）ま

四四

たクルッセンシュテルン（羽仁氏譯附書、第一巻の末尾）もこれを痛撃してゐる。そしてこのことが中央政
界の問題となり、ゴロウニンの第二回世界周航（一八一七年—一九年）には會社のアメリカ植民地におけ
る状態と原住民にたいするロシア人の行狀の調査が命ぜられたほどである。ゴロウニンの調査の時代（一
八一八年）に會社はアレウト列島を除くアメリカ植民地だけに十九の植民部落をもち三百五十四人のロシ
ア人が八千四百四十六人の男女老幼の原住民奴隸と二百八十六人の混血兒を支配してゐた。その中心的根
據地は最初はカヂック島のバヴォル港、次いでシトカ灣のノヴォ・アルハンゲリスク要塞植民地（一八〇四
年建設）で、その南端はサンフランシスコ灣の北岸、北緯三八・三三、東經一二・四五のロツス要塞（一八
一二年建設）であつた。ペラノフはロツス要塞の建設と同時に食料品補給の基地とするためハワイ諸島中
のカウアイ島にも一時（一八一四年—一六）植民地を設け、ドクトル・フィシエルなる者を指揮者とし二
隻の船に武装兵を乗せ植民地守備のためと稱して上陸させワイメア河口に要塞を築きカウアイ島の酋長を
懐柔してハワイ全諸島の奪取を企てたが、初代のハワイ王カメハメハ二世が間もなくそれを知り、アメリ
カ人の援助をえてこれを撃退した。この事件は現在普通歴史に書き落されてゐるが當時英米を刺激して國
際問題化しロシア政府は會社私人の行爲として糊塗してしまつた。「ゴロウニン」第二回航海記には事件の經
過を調査した記載がある（これはカムチャツカを根據としカリフォルニア、ハワイ、マニラ、廣東を弧線
を以て包括する北太平洋に覇權を打樹てようとした十九世紀初頭ロシアの太平洋政策の現はれてあつた。し

譯者 補註

四五

かし本國から遠く隔絶し、資本・技術・人的資源が足らず、また漁獲により毛皮獸の狩獵産業が凋落する一方、合衆國の擡頭、モンロー主義の宣言（一八二三年）英米のアラスカ國境協定の成立（一八二五年）そしてアメリカ勢力がコロンビア河口植民地から西岸一帯に發展してゐるとともに、これに壓倒されて露米會社の事業はますます不振に陥り採算不能となつた。ロシアはクリミア戦争の失敗後一八六七年アメリカ植民地をアレウト列島と共にアメリカへ賣却したが、それと同時に東方政策の方向を轉じ中央アジアの侵略と併行的にアムール河口から沿海州方面への南下に全力を注ぎ、千島と交換して樺太を獲得し、また一時わが對島の占領を企てるなど將來の滿鮮略略策を準備しはじめてゐる。

【六五】十八世紀三〇年代の北氷洋海岸線の體系的な踏査は、夙にビョートル大帝時代に計畫されたもので、その後長期にわたり實行に移されたいはゆる「北方大探検」のことである。それらの探検隊の多くは事實上地域的に獨立して行はれたが一七三四年一七四三年に亘るベリングの「大探検隊」の組織のなかへにはここに擧げられてゐるオフツィン、ラフテフ兄弟、ブロンチシチュフ等のほかムラヴィヨフ、バズロフ、マリイギン、スクラトフ、ミニン、チェリエスキ、ステルリゴフなどがある。これらの諸探検隊は西伯利各地の河口地方で乗船を建造し北氷洋沿岸の探検に従事し、逐次に未踏査區域の空白を埋めていつた。ベリングスはクツクの第三回航海に参加したイギリス人航海士で、後ロシアへ招聘され一八八九年

一九二年の間サリイチェフ大尉（のち大將、海軍大臣）とともにオホツク港を出てアレウト列島、アラスカ南岸、ベリリング海峡の兩岸を探検した。ウラングリ男はゴロウニン第二回世界周航に参加したのち一八二〇年にコロンビア河口を發し、北極海を探検して北緯七二・二度に達しウラングリ島を發見した。ロシア人のアジア北岸の海上探検はこの時代をもつて一應完遂したとされてゐる。

【六六】ロシア人が日本の踏査をくはだてた記録は一七二一年（正徳元年ビョートル一世時代）にカムチャツカの反亂カザック隊長ゴズイリョフスキイ（補註〔五四〕〔六二〕参照）がヤクツク政廳の命令で千島第三島まで達して引返したのを最初とする。次いで一七一九年フョドル・ルーデンおよびイワン・エフレイノフ等がビョートル大帝の命によりペテルブルグから派遣されて千島第五島まで順次に探検したが暴風のため日本本土に達せず引返した。彼らはいづれも千島土人や日本の漂流民から日本に關する若干の報道をえて報告してゐる。ベリリング第二回探検に際して特に日本の測量と通商關係設定の命（補註〔六七〕参照）をうけたシュバンベルグ（乗船アルハンデル・ミハイル號）はワルトン（乗船ナデジダ號）その他二隻の小艦を率ひホホツク港を出發し、途中暴風のため船隊は離散した。一七三九年（元文四年）シュバンベルグとワルトンはいづれも日本の海岸（前者は仙臺領牡鹿郡海岸、後者は房州天津海岸）に達し、大勢の漁民や村役人に逢つたが公式の交渉をとげることなく沿岸の測量をして引返した。彼らの報告によると、訓令にもとづき日本漂流民を通譯として同伴するため探したがそのときカムチャツカに漂流民がゐなかつたので千

島土人を同伴したけれども彼らの言葉は日本人に通じなかつたので手真似でする以外には何ごとも意思を
通することができなかった。この元文の黒船来航にたいする日本側の記録によると交易は明らかに日本人
とロシア人との間に交戦が行はれたときと少しも書かれてない。しかしシュバンベルグの報告を元
干の貿易行為（或る日本人は金貨や品物をだして舶載物を貰つてゐる）がおこなはれてをりワルトン大尉
の部下らは上陸して酒食の饗應をうけ、また船内で日本人を饗應して交歓した。そしてシュバンベルグは
日露交易の可能性を説いてゐる。更にシュバンベルグはベーリングの死後第二回の日本探検を企てたが、
部下の統率に失敗し途中から引返した。（『ベーリング探検隊文書集』一九四二年刊、原版各所、次いでエカテリ
ナ二世女帝の命により一七九二年（寛政四年）に日本漂流民光太夫らを送還して根室に來泊した第一回の遣
日使節アダム・ラクスマンは、交渉を拒絶されたが附近の測量をして歸つた。日本沿岸をもつとも詳細に
測量したのは一八〇四年（文化元年）仙臺の漂流民津太夫らを送還し露使レザノフを乗せて長崎へ來航した
ロシア最初の世界周航艦ナデジダ號（四百噸）の艦長クルゼンシュテルンでその記録は航海記（クル
ゼンシュテルン日本紀行）邦譯版第一巻）に詳述されてゐる。一八一一年（文化八年）千島南部の測量を命ぜ
られて任務遂行中にわが國に捕はれたゴロウニンと、その副艦長でゴロウニン救出につとめたリコルドは
千島全島と北海道一部の精細な測量をしてゐる。その記録は『千島探検記略』（ロシア海軍省一八一九年刊日
本語訳）と別題の獨立した第一回航海記中の第三巻）に纏められてゐる。尚ほゴロウニンは『日本遭厄記事』
および『日本幽囚實記』として邦譯されてゐる原書（第一版一八一六年刊）の第三篇『日本國家および日
本國民について』（この篇は前記の邦譯では省かれてゐる）では樺太「半島」が日本の屬領であることを述べ日
本人と樺太アイヌの交渉關係を傳へてをり、一八五一年に出版されたその第二版においてもやはり樺太が
日本の屬領として記載されてゐる。

四八

本語訳）とは別の獨立した第一回航海記中の第三巻）に纏められてゐる。尚ほゴロウニンは『日本遭厄記事』
および『日本幽囚實記』として邦譯されてゐる原書（第一版一八一六年刊）の第三篇『日本國家および日
本國民について』（この篇は前記の邦譯では省かれてゐる）では樺太「半島」が日本の屬領であることを述べ日
本人と樺太アイヌの交渉關係を傳へてをり、一八五一年に出版されたその第二版においてもやはり樺太が
日本の屬領として記載されてゐる。

〔六七〕ベーリング第二回探検に際して元老院や海軍將官會議から幾つもの訓令が與へられてゐる。そのう
ち一七三二年五月二日附でベーリングに交付された元老院の訓令は、アメリカ及び日本との貿易問題に言
及してゐる。「アメリカもしくはアメリカとの中間に存在する他の陸地はカムチャツカより遠からず……一
五〇哩乃至二〇〇哩と認め……それらの諸地方との貿易はロシア帝國に利益をもたらし得べしと云ふ（こ
れはベーリングの提案にもとづいて言つてゐるのである——譯者）元老院は、海洋船に搭乗してアメリカとカムチ
ャツカの中間に介在する新陸地、おなじくカムチャツカの島の、いまのロバトカ岬より日本に連なる諸島、
特にシアンタルスキ諸島を踏査し、……且つ通商交易の設定を眞實に考慮しつ……アメリカ及びアジ
アのすでにヨーロッパ諸皇帝もしくは支那のボグドウィー・ヘンまたは日本ハンの領地の存在すること
場所に侵入せざるよう慎重に注意すべきことを命ずる。（『ベーリング探検隊文書集』この訓令は、キャクと
賣買城とを以て露支開市場とする一七二八年の露支條約が結ばれてから僅か四年を経過した時代に書かれ

譯者補註

四九

たのであり、ロシアはこの對支貿易に特別の利益を感じてゐたので右の慎重さは自然である。一七三九年に日本海岸に到達したシュパンベルグおよびワルトン大尉が日本人にたいして非常に慎重な態度を持したのもこの訓令に基づくものであらう。ペーリングは第一回探検からベテルブルグへ引きあげて間もなく第二回探検が決定する前、すなはち一七三〇年四月に政府へ提言し、日本との通商がいかに有利であり必要であるかを説いて次ぎのやうに言つてゐる。「オホツクもしくはカムチャツカからアムールの河口もしくは日本諸島までの海路を探索することは有益なことであります。けだし彼地においては卓越した場所を見いだし、其處とは若干の貿易關係を設定する見込みがあるからであります。日本人と交易をいたすことは將來ロシア帝國に少なからざる利得をもたらすこととありませう。」(同上書)

五〇

【六八】「コロウニンは第一回航海記(第一巻)でサンフランシスコから僅々五十軒を北に距るカリフォルニアの一點點に一八一二年に建設された露米會社の植民地ロス要塞とイスパニア官憲との交渉経緯について詳述してゐる。それによると露米會社は當時イスパニア權力に反抗してゐたその地のインディアン酋長と物資をもつて租借料を支拂ふ契約で土地の讓渡をうけ、現地のイスパニア官憲は最初それを默認したのみか植民地の建設にいろいろ資材や食料品の供給をして便宜をあたへてゐた。その後イスパニア知事は本國の命令でロス要塞の支配人クスコフに植民地撤去の最後通牒を送つたがクスコフは之を拒否した。ロス要塞にはロシア人およびアレウト族から成る百余名の守備隊兼漁獵隊がをり數門の小口徑砲を備へてゐただけであるが、イスパニア知事は實力をもつてこれを擊退するといふことは敢てせず、イスパニア人にロシア植民地との一切の交渉を禁じただけでそのまゝロシア植民地の存在を不問に附してゐた。併し一八二〇年代に入るとともにアメリカ合衆國議會ではコロンビア河口におけるアメリカ人植民地の建設問題(いはゆるオレゴン問題)と關聯してロス要塞の存在が問題となり、一八二三年露帝アレクサンドル一世が露領アラスカの南境を北緯五十二度と宣言するや當時の合衆國々務卿アダムスは「ヨーロッパ諸國はアメリカ大陸に植民の權利なし」といふいはゆるモンロー主義に據りロシアに抗議するにいたつた。その後にはロシアは事實上アメリカ植民地を維持確保する機会と力を漸次に失ひ、一八四一年にまづロス要塞をアメリカ商人の手に譲渡し、次いで一八六七年にフレウト列島を含む全アメリカ植民地を七百二十萬ドルで合衆國に賣却するにいたつた。ロシアのアメリカ植民地の状態については補註【六四】参照。

【六九】最初にこの噂をもたらしたのは當時の西伯利總督がガリンである。彼は中央アジアの「ダリア」河畔の「イエルクケティ」といふ都會の近くで澤山の砂金がでるといふことをピョートル二世に報告した。スエデンとの戦争で極度に財政難に陥つてゐたロシアは非常に金を必要としてゐた。このイエルクケティが東部トルキスタン、のヤーカーンドの誤傳だといふ事情は後になつて判明したが、最初はずつと近くのアム・ダリア河畔であると信じられてゐた。ピョートル大帝はこの砂金産地を占領する目的で一七一四年にアレクサンドル・ベゴヴィチを派遣したが失敗して途中から引返した。彼は一七一六年の第二回遠征でカスピ海の東

譯者補註

五一

岸に要塞を築き、一七二七年に第三回の遠征を試み、ヒワ汗國まで侵入したが、ヒワ汗の諒計に陥つて殺された。別に西伯利方面からイワン・フゴリツの遠征隊が派遣され、やはり金の所を發見しなかつたが、ヤムイシエフ要塞をきづいて附近のカルムイク族と衝突し、これを征服した。

〔七〇〕ニコライ一世帝（一七九六年—一八五五年）一八二五年即位。一八四七年に青年ムラヴィヨフを抜擢して西伯利總督に任命した。ネヴェルスコイが勝手にアムール河口のニコラエフスクを占領したため、支那との關係を危惧して國內で反對の聲が起つたとき、「ひとたびロシア國旗が掲げられた所ではそれを降ろすことはできぬ」と宣言して中外を驚かした。この皇帝がクリミア戦争に失敗したことは、ロシアが東亞侵略への轉向に全力を注ぐ動機をあたへた。

〔七一〕ビートル大帝の失敗以後ふたたびヒワ汗國の占領計畫に着手されたのは一八三九年である。

〔七二〕アレクサンドル二世（一八一八年—一八八一年）一八五五年二月即位。ニコライ一世のクリミア戦争失敗のあとを受けて即位と共に直ちに講和を締結し、また同年日本との間に開國條約（安政三年）を結んだ。皇帝は内に農奴解放（一八六一）を行つたが、支那の混亂と英佛軍の太沽占領に乘じ、ウスリイ南岸の獲得を策し、愛琿條約（一八五八年）北京條約（一八六〇年）により黒龍江、沿海州地方をロシアの版圖に加へ、東方を支配せよ（ウラディ・ラストーク）といふスローガンと共に現時の浦鹽斯德の基礎を築き、また執拗な外交政策により我國との間に千島樺太交換條約を締結（明治八年）した。同時に中央

アジアの征服を完遂し、西蒙古方面に侵入を圖つた。この皇帝の時代に着々準備された滿蒙經略策はアレクサンドル三世時代のシベリア鐵道建設計畫と共にますます積極化され、その政策はまたニコライ二世によつて繼承され、ロシアの滿蒙侵略政策となつて現はれ、遂に日露戦争の因をなした。

〔七三〕ヘルベルシュタインについては補註「一五」参照。

〔七四〕ボルガル族については補註「七」参照。

〔七五〕スズダリ侯國はヴォルガ上流ニジニ・ノヴゴロド地方（いまのゴリキイ市附近）に十世紀頃から起り十四世紀にはモスクワ大侯國に從屬してゐた。ノヴゴロドについては補註「六」参照。

〔七六〕ズイラン族については補註「二〇」参照。

〔七七〕ボリス・フョードロヴィチ・ゴドノフ。韃靼人の血をうけ一五五一年頃に生れイワン雷帝の近侍となり雷帝の寵妃マリイタの娘マリヤと結婚し、また妹イリナを雷帝の子フョードルに嫁せしめフョードル帝の歿後一五九八年ロシア皇帝となつた。一六〇五年彼れの歿後ロシアは混亂時代に入つた。

〔七八〕ヘラルド・フリドリッヒ・ミルレル（ロシア名はフョドル・イワノヴィチ、一七〇五年—一七八三年）ドイツに生れて歴史學を専攻し一七二五年ロシアへ招聘され教授・學士會員となりロシアへ歸化した。〔七九〕ミハイル・フョードロヴィチ帝（一五九六年—一六三三年）。ロシアの混亂時代のあと諸侯の支持をうけて一六一三年十七歳にしてロマノフ朝最初の皇帝として即位。

譯者 補註

〔七九〕 ステファン・ペロウ。イギリス初期の北洋航海探検者。

〔八〇〕 イサク・マアサ（一五八七年—一六三五年）一六〇一年からオランダ商人としてモスクワに滞在、一六二二年オランダ公使として再度モスクワに來り「西伯利地誌」を書いた。

〔八一〕 「珍奇な人間の話」については補註「二六」および「三〇」参照。

〔八二〕 イデス・イズブラント。元ドイツの商人でピョートル大帝から支那へ使節として派遣されロシア語でその旅行記を書いた。

〔八三〕 ラウレンティ・ラング。ピョートル大帝がペテルブルグを建設する際招聘したスエデンの建築技師で、一七一六年北京へ派遣され、多量の支那骨董品を蒐集して一七八年に持ち帰りペテルゴフ離宮の装飾用としてこれを用ひピョートルの叙感を得た。翌年イズマイロフの遣支通商使節團の輔佐役として派遣され永く北京に滞在して歸り旅行記を書いた。この旅行記は「支那聘使記」と題し長崎通詞吉雄筆作により蘭書から邦譯された。

〔八四〕 ニコライ・スパーフリ（ミレスク）一六二五年頃モルダヴィアに生れ諸國を遍歴した後一六七一年モスクワに至り使節局（後の外務省）の通譯官となり、一六七五年遣支使節となつてモスクワを出發、西伯利、蒙古を通過して北京へいつた。彼の踏査した交通路は爾來露支間の公道となつた。

〔八五〕 ユラク族はオビ河口、いまのネネツ民族區地方に住むサモエド族の一種で現時の人口は二千五百〇四

人と計算されてゐる。

〔八六〕 モスクワ國家の帝位爭奪をめぐる一五九八年—一六一三年の混亂時代をいふ。

〔八七〕 ユリイ・ガスパロヴィチ・クリジァニッチ（一六二七年—一六八六年）ホルワット（セルビア）に生れ、後モスクワに移り筆禍のため西伯利へ流刑されたスラヴ民族初期の思想家・哲學者で、汎スラヴ主義の始祖と云はれてゐる。

〔八八〕 ステパン・ペトロヴィチ・クラシニンニコフ（一七一三年—一七五五年）この探險により有名な「カムチャツカ誌」を著す。

〔八九〕 ニコライ・ミハイロヴィチ・カラムジン（一七六六年—一八二六年）「ロシア國史」の著者。プーシキンはカラムジンを評して「ロシアの古代を發見したコロンブスだ」といつた。ロシア歴史を文學的章句をもつて書いた最初の歴史家と云はれてゐる。

〔九〇〕 ヨハン・ゲオルグ・グメーリン（一七〇九年—一七五五年）ドイツに生れベーリング探險隊に加はりシベリアの植物を調査しドイツに歸つてから「西伯利紀行」「西伯利植物誌」を著す。

〔九一〕 ダニエル・メッセルシュミット（一六八五年—一七三五年）一七一六年ピョートル大帝によりロシアへ招聘され政府の委嘱をうけて最初歐羅巴を、次いで西伯リの調査を前後七年間おこなつた。

〔九二〕 エカテリナ二世女帝（一七二九年—一七九六年）ステッパンに生れ一七四四年ロシアに來て正教に

譯者補註

五五
歸依、一七四五年ピョートル三世の妃となり、帝の歿後一七六二年即位。モシチスキュー、ヴォルテルに傾

倒しロシアへ西歐文化を輸入することに努めた。日本へロシア最初の使節アダム・ラクスマンを送った。

〔九三〕ピョートル・アンドレイヴィチ・スロフツォフ（一七六七年—一八四三年）

〔九四〕バヴオル・ニコラエヴィチ・ミリュコフ（一八五九年—）ロシアの歴史家、立憲民主黨の領袖、

一八七七年革命の初期に臨時政府の外相。主著『ロシア歴史思想の主たる潮流』『ロシア文化史』等は古典

とされてゐる。革命後ベルリンで反ソヴエト新聞を發行し白系避難民の間に勢力をもつてゐる。

〔九五〕アウグスト・ルドヴィヒ・シュレツァ（一七三五年—一八〇九年）ドイツの歴史家。ロシアに招

聘されペテルブルグ大學でロシア古代史を講じ歸國後ゲッティンゲン大學教授となる。ロシアでは科學的歴

史批判の父と云はれてゐる。

〔九六〕セルゲイ・ミハイロヴィチ・ソロヴィヨフ（一八二〇年—一八七九年）モスクワ大學の教授、ロシア

の政治家。ロシア統治組織の改革者。西伯利統治の改革案を作るため一八一九年—一八二〇年の間西伯利總督

となりトボリスクに在つて改革案をつくる。彼の改革案により西伯利を二つの行政區に分ち西部西伯利總

督府は中央アジアおよび西伯利西部の問題を統轄し、東部西伯利總督府は東部西伯利のほか北西アメリカ

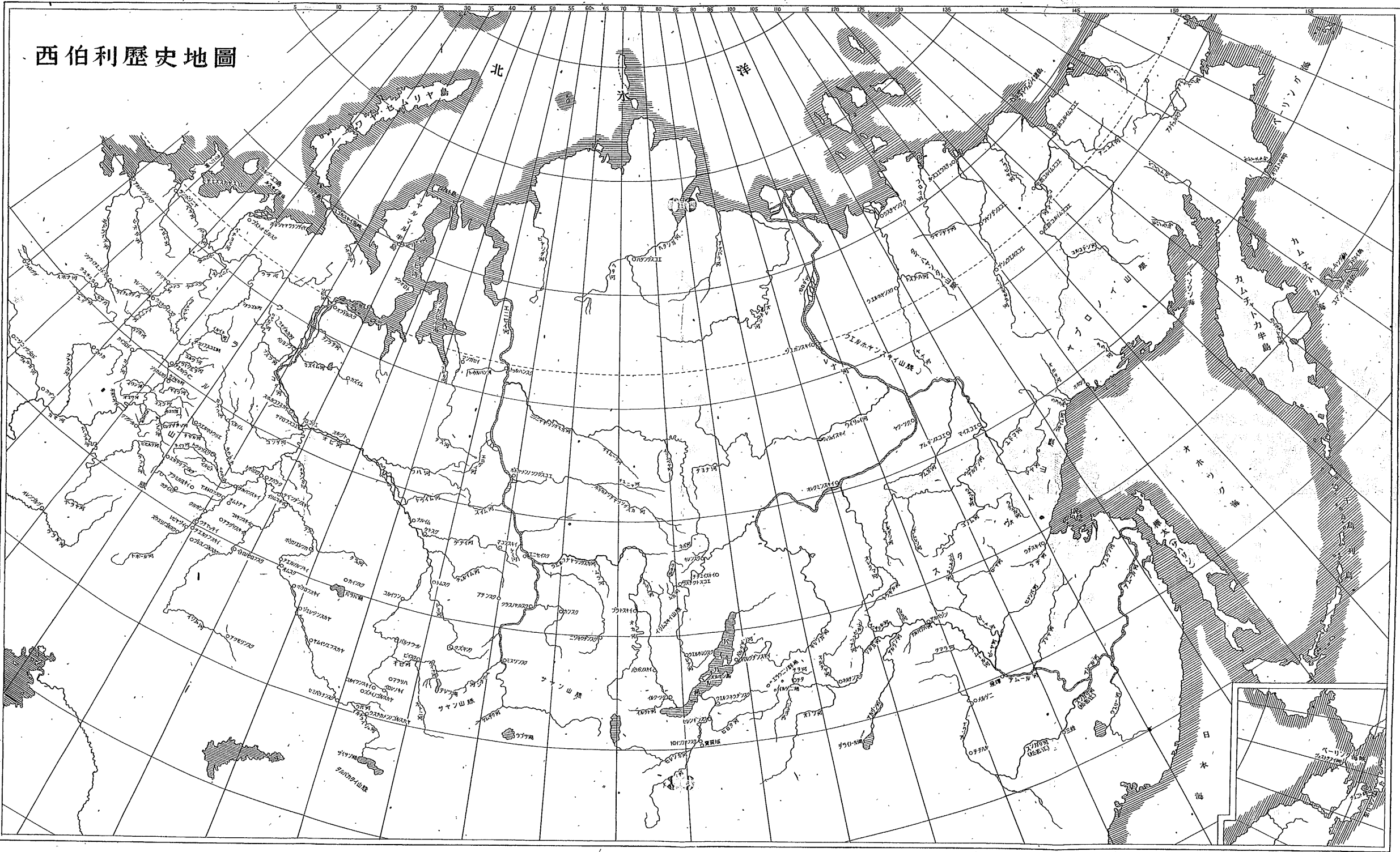
植民地、東亞、太平洋に關する問題を統轄することとなつた。

〔九八〕ヨアン・サモイロヴィチ。一六七二年—一六八七年の間ウクライナの統治者となりウクライナ獨立

陰謀の疑ひをうけモスクワ政府により逮捕されてトボリスクへ流刑、一六九五年その地に死す。

西伯利歴史地圖

附圖解説 本圖は十六、七世紀中にロシア人がウラル山脈とシベリアを征服して太平洋まで東進するにあつて利用したカマ、オビ、エニセイ、レナ、アムールその他の河系交通路の連絡関係を示すとともに、その交通路上の要所々に征服、統治、手配徴収、植民、貿易等の基地として逐次に建設された都市、樞、各營所、堡壘などの位置を示したものである。○印を附した地名の形が附図に「スカヤ」ナヤ」とある場合は堡壘(クレートスチ、「スキ」は各營所(シモグ)、スキト「ツツ」その他(例へばクンギール、ウスタ、ルグ、ウニムトリ、ナリイ、クルガン、ベリゾフ、オレンブルグ等の如きの堡壘を有するものは都市(シロド)である。これらの基地の多くはその後幾月とともに都市又は村落として發達したが、マンガセイの如く風に雲霧に降したものは、ユカランブルグ(スヴニドロフスキ)の如く改稱された所もある。しかしだいたい現在まで舊稱が保存されてゐる。(詳細は本文記事と對照)



調一0523

0252